

学生同士がつながる支援コミュニティづくり —支援学生の「主体性」を引き出すマネジメント—



学生同士がつながる支援コミュニティづくり —支援学生の「主体性」を引き出すマネジメント—

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）
平成 25・26 年度モデル事例構築事業
「情報保障者における主体性の醸成を目指したマネジメント」成果報告

もくじ

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク モデル事例構築事業について	4
はじめに	6
用語解説	7
第1章 支援学生の主体性醸成にかかわるマネジメント	9
1. 障害学生支援とマネジメント	10
1) 障害学生支援のマネジメントについて	
2) マネジメントにおける2つのアプローチ	
3) 支援学生の主体性の醸成を目指したマネジメントの実践と課題	
2. 支援学生の主体性の醸成におけるマネジメントのポイント	12
第2章 支援学生の主体性を醸成させるための実践	17
1. 利用学生との協働を主眼とした企画の実践事例	20
実践事例①「障害学生の自己紹介企画」	
やってみました！実践報告	
実践事例②「夏期合宿でのミーティング」	
やってみました！実践報告	
実践事例③「夏期合宿での講演会」	
コラム1 交流分析で見直す利用学生と支援学生の関係性	25
2. 学内行事や技術研修・交流企画などに取り入れられる実践事例	26
実践事例④「障害のある学生の修学支援に関するFD/SD 講演会」	
やってみました！実践報告	
実践事例⑤「2大学合同：パソコンノートテイク連係入力の基礎講座」	
実践事例⑥「2大学合同：全国手話検定4級・5級対策講座」	
3. 日常の取り組みやコミュニケーションの中で取り入れられる実践事例	30
コラム2 なぜ経営学なのか！？ドラッカーから学ぶ障害学生支援	32

第3章 支援学生を対象としたモデル研修の取り組み	33
1. 支援学生研修会—利用学生と学ぼう！—について	34
2. 研修内容と当日の様子	36
研修①オリエンテーション・自己紹介	
研修②ロールプレイ	
研修③グループディスカッション	
研修④行動プランづくり	
コラム3 利用学生の“本音”を引き出すには？アドバイザーの言葉から	54
おわりに	56

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク モデル事例構築事業について

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)では、2004年の発足以来、聴覚障害学生の高等教育支援に必要な教材の開発および知識・技術の蓄積・普及に努めてきました。現在では、障害学生支援の体制を構築する大学が徐々に増え、聴覚障害学生を取り巻く環境は向上しつつあります。

しかし、障害学生支援のすそ野が広がると同時に、新たな課題が顕在化してきました。たとえば理系や医療系あるいは語学や実験、実習などの授業における支援では、従来行われてきた支援方法では十分な対応ができず、こうした場面での支援方法の確立が必要とされています。また、全学的な支援組織をつくることや支援担当者の専門性を向上させることも、より充実した支援のために取り組むべき課題と言えます。

そこで PEPNet-Japan では、こうした新たな課題に対して、複数の大学がともに取り組み、先進的な実践事例を生み出していく事業の枠組として、モデル事例構築事業を設けました。今まさに解決策が求められている問題について、多くの大学にとって有益な成果を発信していくため、事業テーマは連携大学・機関からの応募制とし、その中から連携大学・機関関係者の投票によって決定する方法をとりました。その結果、今回は、地域団体として大学の支援体制構築に関するコンサルティングや情報保障者の指導・養成を行っているみやぎ DSC から提案された「情報保障者の主体性の醸成を目指したマネジメント」が、投票によって採択されることとなりました。

事業テーマ「情報保障者の主体性の醸成を目指したマネジメント」について

聴覚障害学生への情報保障支援は、多くの大学において支援学生がその中心を担っている現状があります。また、大学や地域の状況に応じ、地域の通訳者の協力を得ることもあります。支援学生が存在が支援の質向上や支援室の発展的な運営にとって有益に機能するために、大学側はどのようなマネジメントを行っていけばよいか。また、地域の人的資源の力を、大学における情報保障支援に活かしていくにはどのような協力体制が求められるか。これは大学の支援体制にとって現在の大きなテーマであり、多くの大学がこうした課題意識に直面しているゆえに、関係者に支持され採択されたものと思われます。平成 25 年度から 2 年間にわたり、みやぎ DSC が主幹となり、協力大学・機関として大阪教育大学、愛媛大学、関東聴覚障害学生サポートセンターが加わって事業を進めてまいりました。事業 2 年目にあたる平成 26 年度には、支援学生対象と学外の通訳者対象のワーキンググループに分かれ、それぞれ事例の積み重ねと発信に取り組みしました。

この事例集は、支援学生を対象としたワーキンググループの活動成果をまとめたものです。この事業で生み出された成果が、多くの大学における障害学生支援の向上に役立つことを期待しています。

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク事務局

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）

平成 25・26 年度モデル事例構築事業 委員

代表 松崎 丈（みやぎ DSC）
 佐藤 晴菜（みやぎ DSC）
 高橋 明美（みやぎ DSC）
 前原明日香（みやぎ DSC）
 太田 琢磨（愛媛大学）
 原田 美藤（平成 25 年度まで愛媛大学）
 池谷 航介（大阪教育大学）（平成 26 年度委員）
 小谷佐智子（大阪教育大学）
 安福 純子（大阪教育大学）（平成 25 年度委員）
 岡田 孝和（関東聴覚障害学生サポートセンター）
 倉谷 慶子（関東聴覚障害学生サポートセンター）

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）

合同企画ワーキンググループ

代表 松崎 丈（みやぎ DSC）
 佐藤 晴菜（みやぎ DSC）
 前原明日香（みやぎ DSC）
 太田 琢磨（愛媛大学）
 原田 美藤（平成 25 年度まで愛媛大学）
 池谷 航介（大阪教育大学）
 小谷佐智子（大阪教育大学）

 白澤 麻弓（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター）
 五十嵐依子（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター）
 中島亜紀子（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター）
 萩原 彩子（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター）

はじめに

この事例集は、支援学生の主体性が醸成することをいかに大学がマネジメントするのかについて具体的な取り組み方法を提案するものです。ここで言う「主体性の醸成」とは、聴覚障害学生支援をよりよいものにするために自らの意思で支援コミュニティへの参加を深め、かつ自分で判断・決定して能動的に取り組めるようになることと考えています。

これまで十数年間にわたる聴覚障害学生支援の歴史で支援学生の養成・研修に関わる実践的見識は蓄積されています。日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet - Japan）は、支援学生の支援技術の向上のために、ノートテイク、パソコンノートテイク、手話通訳等に関する各種通訳の技術等について研究し、これら知見をもとに各種通訳に関する書籍や冊子を発行したり各種通訳の研修プログラムを開発したりしてきました。また、支援学生のモチベーションの維持・向上のために、報酬、評価制度、表彰制度、情報保障者に過剰な負担をかけない環境整備、スタッフとして組織運営にも関わるなどといったインセンティブを形成することも必要であることも指摘してきました（書籍「一歩進んだ聴覚障害学生支援」（2010, PEPNet-Japan 編）にて詳述）。しかし一方で、各大学で、支援学生が継続的に活動したり研修会や学習会に参加してもらうことがなかなか難しいという状況が現在も起きています。また、支援学生の研修や情報交換を継続的に実施していない大学もまだ見られます。支援学生の技術やマナーが低下して情報保障が適切になされないことで、聴覚障害のある学生が情報保障を利用することを避けたり指摘するとやめられてしまうのではないかと恐れて言えなかったりするケースも残念ながら起きています。こうした現状の背景の1つに、情報保障支援に対する支援学生の「主体性」の醸成に行き詰まっており、この打開策を私たちはまだ見いだせていないのかもしれないかもしれません。また、私たちは、支援学生を支援の「資源」としてではなく「主体」として情報保障支援により取り組めるように係わっているのだろうかと思いを込めて思わないでもありません。近年の障害者の人権に関わる国内法の整備で大学の障害学生支援体制にも大きな変革が求められている現在、支援学生の「主体性」の醸成につながるインセンティブは何か、そのために大学側にどのようなマネジメントが求められるのかを今一度検討しておく必要があるでしょう。

そこで以上の現状を改善すべく、PEPNet-Japan は、平成 25・26 年度モデル事例構築事業「情報保障者における主体性の醸成を目指したマネジメント」で大学間連携によるプロジェクトを立ち上げ、以下の取組を行いました。支援学生の主体性の醸成につながるインセンティブや必要とされる環境整備の方策を調査研究で明らかにするとともに、各大学の取組から先の調査研究の結果と関連するような事例の掘り起こしや支援学生対象の研修会を実施しました。この 2 年間の成果をもとに支援学生の主体性の醸成につながると思われるモデル事例をまとめたのが本冊子です。皆さんにとって支援学生との係わりや研修のありかたを見直し、聴覚障害学生支援を展開させる一助となることを願っております。

平成 25・26 年度モデル事例構築事業

「情報保障者における主体性の醸成を目指したマネジメント」

事業代表者 松崎 丈（主幹機関：みやぎ DSC 代表）

用語解説

この事例集をお読みいただく上で、特にその意味合いを理解しておいていただきたい用語について、解説します。

主体性：

外部からの権威や権力に盲従してしまうことを退けて、自らの意志に基づいて判断・選択・行動をし、かつ周囲に働きかけることです。

支援学生の「主体性」の場合、情報保障活動の現場で起こる様々な事柄に対して、積極的に関与しなかったり問題解決を人任せにしたりすることよりも、むしろ自分で判断したり考えて行動したり利用学生や他の支援学生などにも働きかけて一緒に問題を解決したりすることを言います。

支援コミュニティ：

ある目標・関心・価値・規範などを共有し、目標達成や価値の維持のために一緒に活動する共同体です。例えば、所属感や情緒的安心感を持ってメンバーシップを発揮し、メンバー同士が影響し合っていると感じられる、コミュニティが個人のニーズを充足するように働きかけ、それが他のメンバーのニーズの充足にもつながる、問題や重要な出来事を共有して精神的なつながりを形成するなどが挙げられます。

協働：

複数のメンバーが共通の目標を共有して、主体的かつ能動的に合意形成を図ったり役割を分担したり作業を一緒に行ったりすることです。

また、情報保障支援を担う学生や聴覚障害学生について、この事例集では以下のような主旨で表現を統一しています。

支援学生：

情報保障支援に関わっている一般学生。通訳活動に取り組む学生だけでなく、情報保障団体の企画・運営を担う学生も含まれます。

利用学生：

情報保障支援を利用している聴覚障害学生。支援学生が情報保障活動をより良いものにしていく上で欠かせない存在です。

第 1 章

第1章 支援学生の主体性醸成にかかわるマネジメント

松崎 丈（みやぎ DSC）

1. 障害学生支援とマネジメント

1) 障害学生支援のマネジメントについて

現時点での聴覚障害学生支援において、支援学生は、情報保障支援の「要」といってもよいほど非常に重要な存在です。支援学生が情報保障支援に関わる諸問題に主体的に取り組むことによって、学内の聴覚障害学生支援の活性化はもちろん、障害の有無に関係なく誰もが平等に参加できる大学づくりにもつながるのです。

よりよい情報保障を実現させるためには、支援学生が聴覚障害のある学生との協働作業を行うことが必要不可欠です。そのためには協働できるようなシステムを備えた学生支援コミュニティ（支援組織）の存在が欠かせません。活性化した支援コミュニティで活動することは学生にとって楽しくやり甲斐があります。そこで一人だけでは達成できない活動の成果が生まれれば、個々にとって自己充実感を高められるインセンティブが何らかの形で返ってきます。個々の自己充実感が高まって活動を継続したりより能動的に取り組むことで、支援コミュニティは一層社会的な貢献をしていくことができます。社会的な貢献とは、前述した「聴覚障害のある学生も平等に参加できる大学」や国が提唱する「共生社会」の実現に寄与することです。以上が、支援コミュニティにおける組織マネジメントについての基本的な考えになります。

2) マネジメントにおける2つのアプローチ

こうした枠組みで考えていくと、「マネジメント」が目指すものは、組織や社会をよくすることではなく、人が組織や社会をよりよくしたいと思い、そのために必要な行動への変容を促すことになります。こうしたマネジメントの手法としては、次のように2つのアプローチがあります。

表1 マネジメントにおける2つのアプローチ

アプローチ1 制度設計と運用	
説明	支援コミュニティの組織の仕組みや組織文化などを作って、人を動かす方法
例	学生も参加できる仕組みを持った組織体制を作る、養成・研修や啓発・広報などの業務を過重な負担をかけない範囲で学生に任せる、学生組織が自覚的に責任を持って活動するために学生組織の規定や支援活動上の倫理を決める。
アプローチ2 対人コミュニケーション	
説明	個人対個人のコミュニケーションを使って、人を動かす方法
例	経験のある学生が初心者学生に情報保障の目標、意義や工夫を伝える、活動の成果を評価する（褒める、励ます、注意する）。事務的に指示や評価を出し合うのではなく、率直な思いや意見を出し合って協働して問題を解決することが重視される。

どのアプローチも、組織を「人々の集合体」ではなく「人と人との係わり合いの場」としてダイナミックに捉えています。マネジメントする側は、人と人との係わり合いの状況を観察・評価しながらその時々で両方のアプローチを活用して必要な取り組みをします。特に、学生同士の人間関係のあり方も重視する必要があります（これについてはコラム「交流分析で見直す利用学生と支援学生の関係性」を参考にしてください）。こうしたマネジメントを、数年間しか活動ができない聴覚障害のある学生や支援学生だけが担うのは多少限界があるでしょう。したがって、大学が支援コミュニティを組織としていかにマネジメントできるかが重要になるわけです（障害学生支援とマネジメントの関係については、コラム2「なぜ、経営学なのか！？ドラッガーから学ぶ障害学生支援」を参考にしてください）。

3) 支援学生の主体性の醸成を目指したマネジメントの実践と課題

ここでは、前述したマネジメントの基本的な考えとアプローチを踏まえ、支援学生の主体性の醸成を目指したマネジメントを行う上でどのようなことを考える必要があるのかを述べます。

支援コミュニティが聴覚障害のある学生のニーズに寄り添った組織として機能するためには、聴覚障害のある学生がまず当事者として支援コミュニティに意思表示したり異議申し立てをしたりすることが必要だということがよく言われます。しかし聴覚障害のある学生が当事者として発信できるかどうかは、ひとえに支援学生との関係性のありかたにかかっていると思います。聴覚障害のある学生の大部分は、大学に入学するまで学校でニーズの発信や異議申し立てをする機会があまりなく、むしろ保護者と教員の方で支援の有無や手だて等の検討が進められることが多いのです。聴覚障害のある学生にとっては、支援学生のように一緒に考えてくれる人との係わり合いを通して発信できるように成長していくことが非常に重要になるわけです。そこで大学は、聴覚障害学生だけでなく支援学生の「主体性の醸成」にも着目してマネジメントする必要性が出てきます。特に、主体性の醸成に関して以下のような課題にどのように取り組むのかを考えねばならないでしょう。

課題1 障害学生支援活動を継続していけるか？

一般学生は、入学式やオリエンテーションなどで障害のある学生の存在や支援者の募集を知り、面白そうだからやってみようという漫然とした関心だったり、人の役に立ちたい・支援技術を身につけたいという動機だったりあるいは謝金や単位を取得できるということで支援を始めます。

しかし、支援活動を始めてみると、情報保障技術の熟達化、様々な講義形態・内容など現場に応じた対応力の向上、活動を継続するモチベーションの維持などが要求されます。支援学生の技術やマナーの低下によって情報保障が不十分に行われてしまうことも避けなければなりません。一般学生にとって、学業、サークルやアルバイトなどを両立しながら、聴覚障害のある学生が教育を受ける権利を保障するために様々なことが要求される支援活動を継続的に行ったり、支援コミュニティに積極的に参加したりできるのが課題になるわけです。

課題2 聴覚障害のある学生との関係や係わり方を省察・実践していけるか？

支援学生は、障害のある学生との係わり合いの経験が皆無に近く、かつ聴覚障害のある

学生に対して数的に多い立場にあります。そのためか、情報保障現場で聴覚障害のある学生と支援学生の合意形成過程において、支援学生が聴覚障害のある学生のニーズや背景を丁寧に聞きださないまま問題解決の方法を提案したり、聴覚障害のある学生に対してどんな影響を与えるかを十分に考えたりすることがない、ままよかれと思って安易に結論を導こうとすることが少なくありません。こうした対応は、支援学生の善意から発せられるものではありますが、時として聴覚障害のある学生の言動を「抑圧」するような結果になることもあります。聴覚障害のある学生が率直に発言できなかつたり支援学生側の働きかけに合わせざるをえなかつたりします。したがって支援学生は、聴覚障害のある学生との「関係」や「係わり方」を省察しながら聴覚障害のある学生との関係性を深めるように実践していけるかが課題になります。

この2つの課題を中心に支援学生の主体性の醸成を目指したマネジメントを行うことで、支援コミュニティが聴覚障害のある学生のニーズに寄り添ったものとして機能できるのではないかと考えられます。どのようなポイントで上記のマネジメントを実践したらよいのかについては、次節でみていきましょう。

2. 支援学生の主体性の醸成におけるマネジメントにおけるポイント

それでは支援学生の主体性が醸成するには、どのような観点でのマネジメントが重要となってくるのでしょうか。これについて本事業の一環として、PEPNet-Japan 連携大学・機関のうち15校に在籍する聴覚障害学生、支援学生、支援担当教職員を対象に、支援学生の主体性醸成に関わる調査研究をしました。

支援学生群は当初、活動を始めたきっかけとして内容別に分類すると、次のように4つのグループになりました(図1)。「漫然とした関心(60件)」、「具体的な関心(31件)」、「支援スキルの習得(26件)」、「謝金(7件)」です。

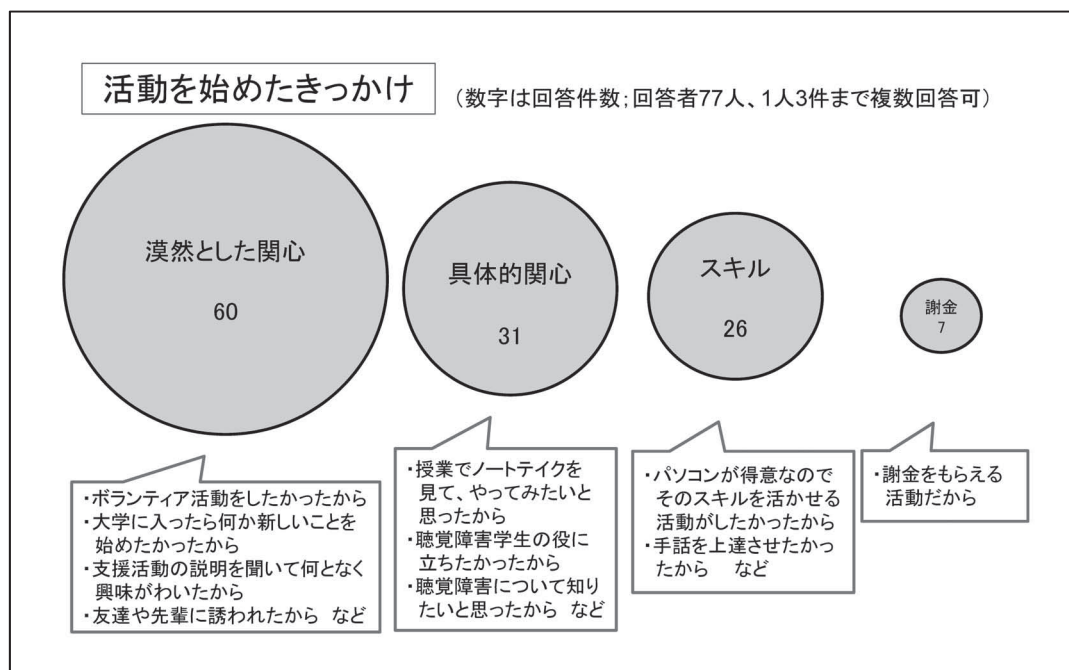


図1 支援学生が活動を始めたきっかけ

その後も活動を継続している要因として支援学生群が捉えているものとしては 7 つのグループに分かれ、「学生との交流 (58 件)」、「役に立ったという実感を得る (43 件)」、「利用学生との深い係わり (28 件)」、「支援スキルの向上 (28 件)」、「支援体制への深い係わり (23 件)」、「視野が広がる (11 件)」、「謝金がもらえる (9 件)」でした。また、学年別に分布状況を見ていくと、経験年数が短い 1 年次と 2 年次では、「支援スキルの向上」、「学生との交流」、「役に立った実感」、「利用学生との深い係わり」に多く分布しています。3、4 年次では、「学生との交流」、「体制への深い係わり」、「役に立った実感」、「利用学生との深い係わり」「支援スキルの向上」となり、院生他では、「学生との交流」と「利用学生との深い係わり」に多く分布していました。(図 2)

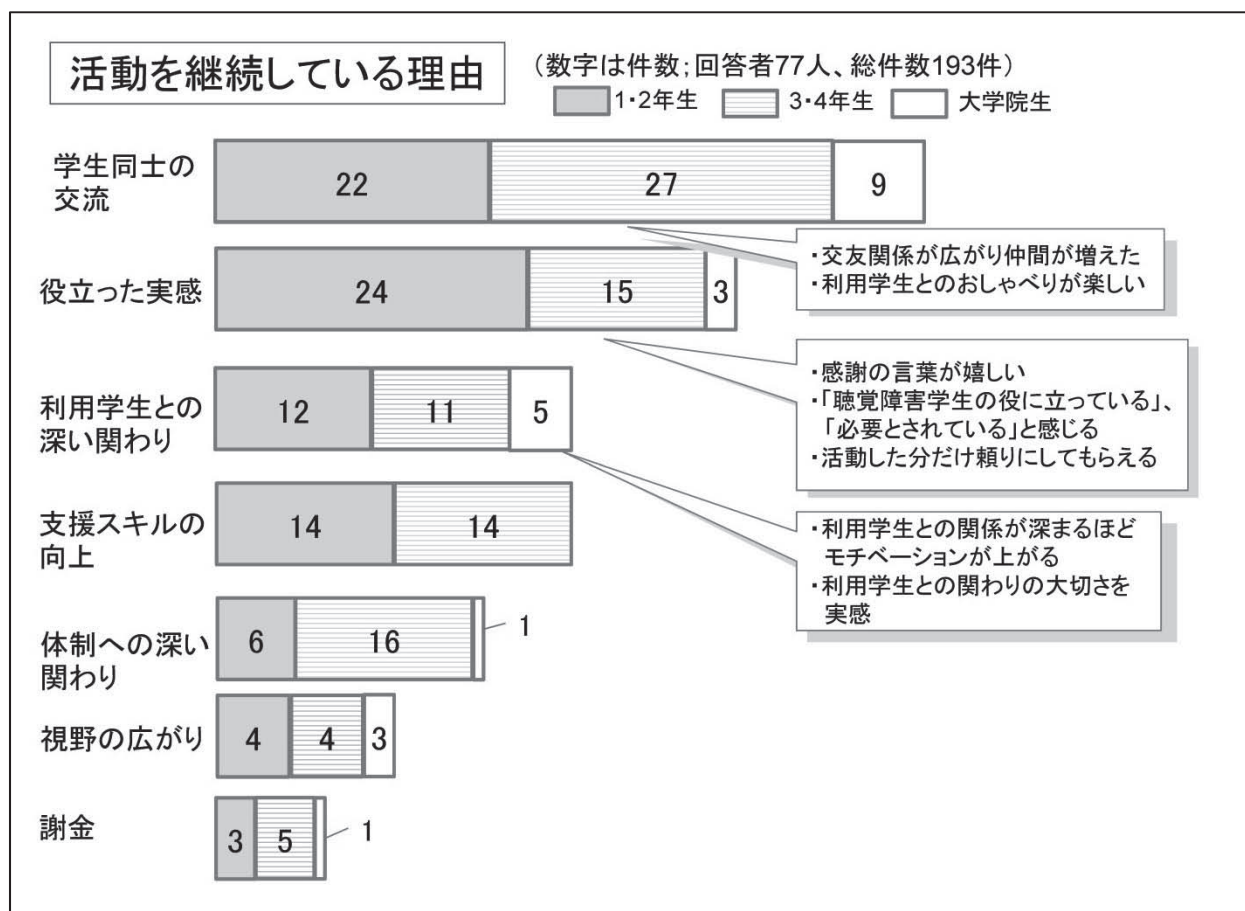


図 2 支援活動を継続している理由

一方で、利用学生群は、求める支援学生像として、「利用学生と支援学生との協働作業 (12 件)」、「ニーズ・状況に応じた支援スキル (7 件)」、「支援に対する心構え (3 件)」、「聴覚障害への関心・理解 (2 件)」、「手話で会話できる (2 件)」、「クラス全体での支援 (2 件)」の 6 グループに分けられました (図 3)。

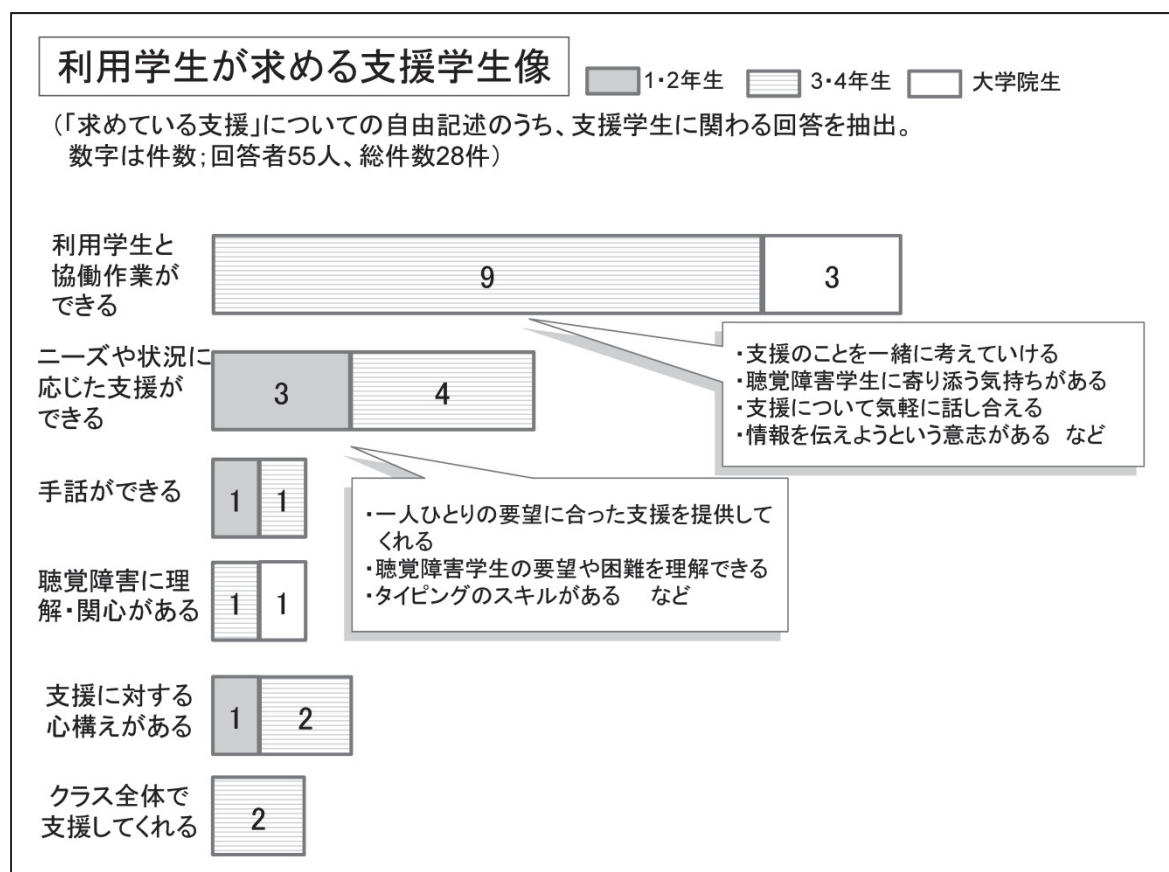


図3 利用学生が求める支援学生像

支援担当教職員群は、支援学生の現状に対する認識については、支援学生の動機づけに関わる諸問題が挙げられ、「所属感の未形成」「貢献感の不足」「スキル向上・改善の停滞」「学生間の交流の停滞」「学生間の関係性の形成困難」の5グループに分かれました。また、支援職員が支援学生の研修等に関して取り組んでいる内容については、9つのグループに分かれました(図4)。

「現場の問題を聞く」、「支援学生と係わる機会を作る」、「感謝・評価を伝える」、「活動の参加範囲を広げる」、「視野や教養を広げる」、「支援スキルを高める」、「謝金で意欲を高める」、「人間関係を深める」、「相互研鑽を促す」です。この現状認識と取り組み内容の関係について、アンケート調査結果からは、現状がこうであるからこの取り組みをしているといった記述は皆無でした。支援職員は、日常的に支援学生への研修活動の一環として以上の取り組みを行っているものの、これらが支援学生のモチベーションや支援技術の維持・向上につながる環境整備として関連付けさせて行っているわけではないようです。

支援学生の動機づけに関わる課題と取り組み内容の例

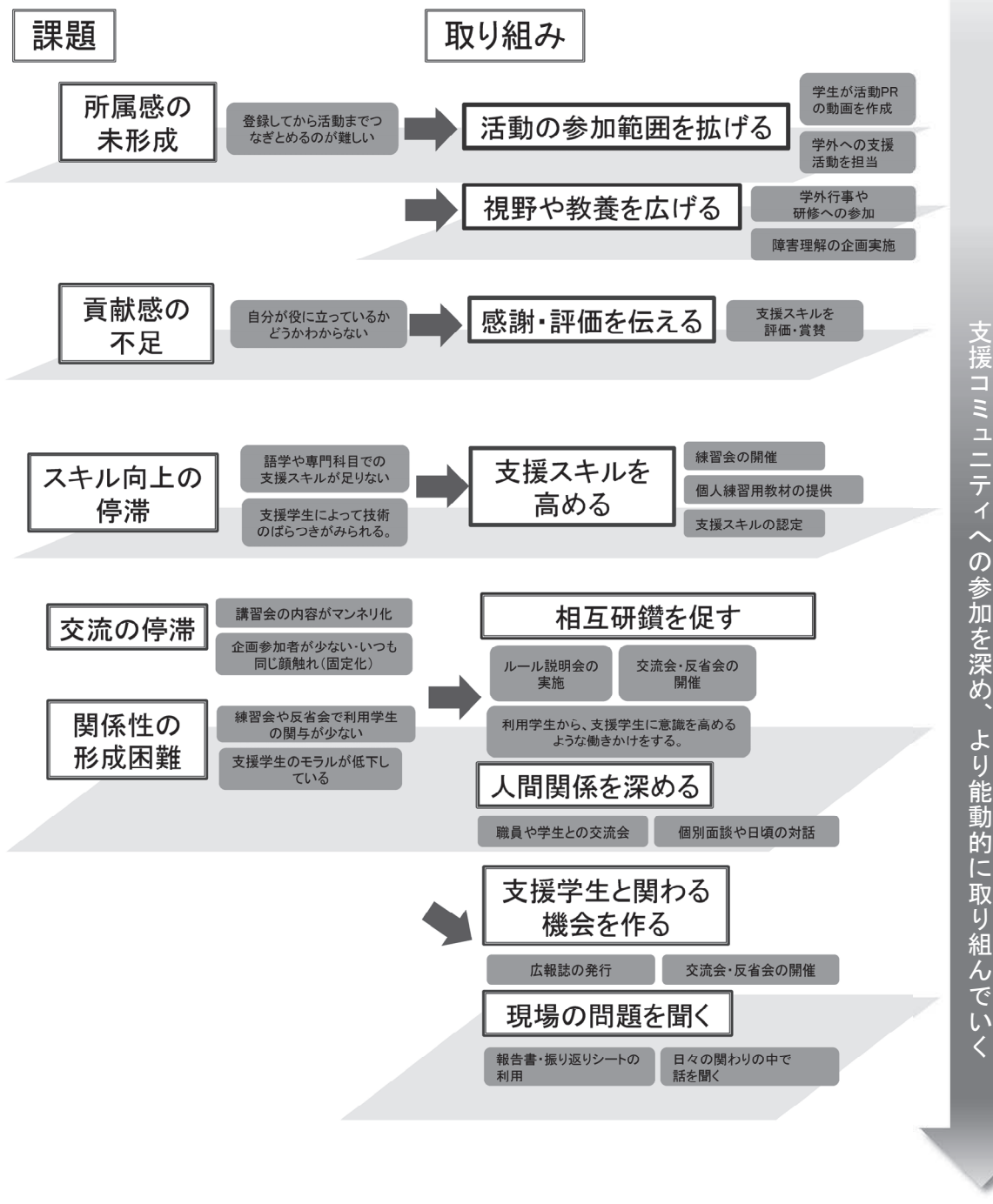


図4 支援担当教職員が感じる支援学生の現状および取り組み例

以上の三者の結果を考え合わせると、支援学生が活動を継続する主な要因として、聴覚障害のある学生や他の支援学生との交流を通して協働作業ができるような関係性を形成し、かつ支援コミュニティの運営にも深く関わっていくということが挙げられるのではないかと思います。これが、支援学生が活動を継続していく上で重要なポイントであるといえます。支援学生にとっては、支援スキルを高めたり謝金を支給されたりすることよりも、自分とは異なる他者との係わり合いを通して一人だけでは得られない大きな成果を生み出すことの方に、楽しくやり甲斐があることはもちろん、人間としてのありかたや人と人との分かり合うことの意味を深く考えさせられる価値を見出しているのかもしれません。

このように個々の支援学生の主体性を醸成する、つまり支援コミュニティへの参加を深め、能動的に取り組んでいくようになるために、支援職員は、上記のポイントをおさえて支援学生が聴覚障害学生支援をよりよいものにしていくようにマネジメントを実践することが求められるといえます。支援学生の主体性が醸成されれば、聴覚障害のある学生にとってはニーズや背景を発信しやすくなり、全学的な聴覚障害学生支援も活性化されていくことでしょう。

次章では、以上のポイントを踏まえたモデル事例をいくつか紹介します。

第 2 章

第2章 支援学生の主体性を醸成させるための実践

本事業では、支援学生の主体性を醸成させるための実践を収集したり実際に取り組んだりして、モデル事例の蓄積を図りました。ここでは、それらの実践事例を紹介します。

実践事例①～⑥（p20～29）は、第1章で述べた事業の主旨に照らし、支援学生がより主体的に支援活動に携わるための、しくみづくりやマネジメントの具体的活動として行われたものです。特に利用学生との関わり、利用学生との協働という視点に立って取り組んだものです。

また、日頃のコミュニケーションの中に取り入れられる小さな工夫や、参加者を募って実施する研修企画など、一年間の支援活動の中の様々な局面で取り入れられる事例もあります。表2および図5を参考に、どのような課題解決のために取り組みたいか、またどのような機会に実施できるか、各大学の事情に合わせ効果的な事例を探してみてください。

表2 実践事例一覧

No	取り組み名	掲載頁
利用学生との協働を主眼とした企画の実践事例		
1	実践事例① 障害学生の自己紹介企画	p20
2	実践事例② 夏期合宿でのミーティング	p22
3	実践事例③ 夏期合宿での講演	p24
学内行事や技術研修・交流企画などに取り入れられる実践事例		
4	実践事例④ 障害のある学生の修学支援に関するFD/SD講演会	p26
5	実践事例⑤ 2大学合同：パソコンノートテイク関係入力の基礎講座	p28
6	実践事例⑥ 2大学合同：全国手話検定4級・5級対策講座	p29
日常のコミュニケーションや支援業務の中で取り入れられる実践事例		
7	開かれた支援室づくりの工夫	p30
8	日頃の言葉かけの工夫	p30
9	定期的な支援活動ができない学生に参加の機会をつくる工夫	p31
10	活動経験の長い学生に活躍の場をつくる工夫	p31
11	利用学生との意見交換の場を設ける工夫	p31
支援学生を対象としたモデル研修の例		
12	研修1 オリエンテーション（自己紹介）	p36
13	研修2 ロールプレイ	p38
14	研修3 グループディスカッション	p41
15	研修4 行動プランづくり	p48

取り組みやすさ 目的・課題	すぐできる・ 日常的に取り組める	準備が必要・ 行事として実施
利用学生との 関係性を形成したい 障害についての 理解を深めたい 利用学生・支援学 生同士の交流を 深めたい	<div data-bbox="440 573 608 703">1.障害学生の 自己紹介企画 (p20)</div> <div data-bbox="616 450 818 703">11.利用学生との 意見交換の場を 設ける工夫 (p31)</div>	<div data-bbox="834 450 986 703">2.夏期合宿 での ミーティング (p22)</div> <div data-bbox="994 450 1145 580">3.夏期合宿 での 講演会 (p24)</div> <div data-bbox="994 591 1145 703">4.FD/SD 講演会 (p26)</div> <div data-bbox="834 725 986 916">5.パソコン ノートテイク 連係入力の 基礎講座 (p28)</div> <div data-bbox="994 725 1145 916">6.全国手話 検定 4級・5級対 策講座 (p29)</div> <div data-bbox="1153 439 1321 703">14.グルー プ ディスカ ッション (p41)</div> <div data-bbox="1153 714 1321 831">12.オリエン テーション (自己紹介) (p36)</div> <div data-bbox="1249 450 1321 703">13.ロー ル ブレイ (p38)</div> <div data-bbox="1329 613 1385 1039">15.行動プランづくり(p48)</div>
支援スキルの向上 を目指したい 支援活動への 貢献感や所属感を 高めたい	<div data-bbox="440 831 608 927">9.参加の機会を つくる工夫 (p31)</div> <div data-bbox="632 831 818 927">10.活躍の場を つくる工夫 (p31)</div> <div data-bbox="440 949 608 1039">8.日頃の言葉 かけの工夫 (p30)</div> <div data-bbox="632 949 818 1072">7.開かれた 支援室づくりの 工夫 (p30)</div>	

図5 目的および取り組みやすさごとの実践事例一覧

1. 利用学生との協働を主眼とした企画の実践事例

実践事例①	障害学生の自己紹介企画
解決したい課題	利用学生への理解を深めてほしい。
取り組みの内容	<p>①支援学生・利用学生の交流企画の中で、全員で自己紹介ゲームを行った後、聴覚障害学生 1 名が、聴覚障害についての資料を使いながら自分の障害について説明する。</p> <p>②前期・後期開始前の支援活動ガイダンスの際に、利用学生が自らの障害とこれまでの支援利用体験を話す時間を設ける。</p>
開催時期・時間	新年度のガイダンス時 1 回 15 分程度
実施する目的 期待する効果	<p>利用学生の具体的な障害やこれまでの生活についての取り組みを知ることによって、支援の在り方について主体的に考えることができるようになる。</p> <p>特別支援教育以外を専攻する学生でも、障害についての知識や障害を持ちながら修学してきた経験を本人から聞くことによって、今後の支援についてより主体的に取り組むことを期待する。</p>
実施後の効果	<p>【参加者の声】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとり求めている支援は違うと改めて実感し、それぞれに合わせて支援できるように頑張りたいと思った。 ・利用学生が求めていることを知ることができ、ノートテイカーとしてスキルアップしたいという思いがより高まった。 <p>※詳細は次頁を参照</p> <p>【今後に向けて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全員を集めて実施するのは難しく数回に分けて行ったが、継続してほしいとの声が多いため、開催方法を工夫して続けていきたい。

やってみました！実践報告

障害学生の自己紹介企画「It's me!(イツミー!)」(大阪教育大学)

実践事例①を実施したきっかけから実践の様子までを、詳しくご紹介します。

【企画実施まで】

大阪教育大学では、利用学生と支援学生が一堂に会するのは前期後期開始時、年3回の全体会議、そして夏期研修合宿と、計6回の機会があります。7月に実施した全体会議において、学生から「支援利用学生と支援協力学生がもっとお互いに話す機会があってもいいのではないか」という提案があり、他の大学では「自己紹介」の企画を行っているところもあるという情報を紹介しました。そこから学生代表以下、イベント担当学生スタッフが、夏期研修合宿と後期ガイダンスの学生企画として、自己紹介企画を実施することとなりました。

様々な障害を有する利用学生の様子や思いを聞き、普段、支援の場面で接している支援利用学生のパーソナリティを知ることによって、利用学生の状況やニーズを理解し、日々の支援の充実を目指すことを目的として、企画を行いました。

【企画内容】

- 「自己紹介ゲーム」…支援利用学生・支援協力学生が一緒に参加し、簡単なゲームによって決まった人から、指文字を使って名前を紹介し合う。
- 「It's me!(イツミー!)」…支援学生がスライド等を用い、自分自身の障害や大学生活等について自己紹介を行う。
- 「グループ筆談トーク」…6人程度の小グループに分かれて、テーマを決めて筆談トークで交流する。

【参加学生の声とまとめ】

参加した支援学生からは、「利用学生さんにどこまで聞いていいのかわからなかったもので、この機会に聞けて良かった。どういう配慮や工夫が必要なのかを考えるきっかけになった。」「今までは先生の言うことをすべて文字化しようとしていたが、利用学生の話聞いて、一言一句間違いなくノートテイクするというよりわかりやすさを重視していこうと思った。」等の感想がありました。自己紹介とその後の交流によって、支援を充実させていくにはPCテイク等、支援の技能を高めるとだけでなく、お互いが対話によって理解を深めていくことが大切であると気付いた学生が多かったように感じました。

実践事例②	夏期合宿でのミーティング
解決したい課題	利用学生を積極的に理解する姿勢や態度を身に付けてほしい。
取り組みの内容	<p>①話しやすい人数規模になることを考慮し、参加者を 10 名程度のグループに分ける。</p> <p>②支援学生・利用学生が共に前期支援についての振り返りをする。司会進行も学生が担当する。</p> <p>③全員が忌憚なく意見を出せるよう、はじめに各自が用紙に振り返りを書き発表し、出された意見についてグループで検討する。</p> <p>④出された意見を模造紙にまとめ、グループごとに発表する。</p>
開催時期・時間	夏季休暇中 1泊合宿内 210 分（1日目午後 120 分、2日目午前 90 分）
実施する目的 期待する効果	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いに忌憚なく意見交流をする。 ・日ごろ表明する機会の無い意見を交換し、検討する。 ・支援・利用学生お互いの意見を交換し、理解を深める。
実施後の効果など	<p>【参加者の声】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・抱える問題を把握することができ、本気で「どうすべきか」考え話し合う雰囲気を感じ、そこに参加することで目の前が開けていく感じがした。 ・普段は話し合えない（話しづらい）ことが言いあえたと思うし、自分にはなかった新たな視点からの意見などもあり、深い話し合いになった。 <p>※詳細は次頁を参照</p> <p>【今後に向けて】</p> <p>学生から企画・実行したいという希望があったので、今年はそれを尊重したが、盛り沢山の企画となって時間的に余裕がなかった。ミーティングでは、もっとじっくり時間をかけたかったという感想もあり、次回はそれを生かしたいと考える。学生企画と大学の企画の調整が必要であると感じた。</p>

やってみました！実践報告

夏期研修での合宿ミーティング企画（大阪教育大学）

実践事例②をもとに、翌年度、更に内容や進め方を工夫して実施した様子を紹介します。

【企画実施まで】

大阪教育大学に障がい学生修学支援ルームが設置されてから、毎年夏期に研修合宿を実施しています。合宿の中の1プログラムとして「ミーティング企画」を行い、グループで討議したことをまとめ、全体でそれぞれの発表を聞き合う取り組みを実施しました。

支援利用学生（利用学生）と支援協力学生（支援学生）がより相互の理解を深めるとともに、今後の支援活動の充実に向け課題を共有することを目的として実施しました。

【企画内容】

- 10人程度のグループを作り、それぞれが個人作業で「障害学生支援に参加した感想」「支援方法に関する課題」等を付箋に書き込む。
- 一人ずつ自分が書いた内容について補足しながら発表する。
- 似ている意見ごとにまとめて付箋を貼り、グループごとにポスターを作成する。
- グループの代表者が発表し、全体で内容を共有する。

【参加学生の声とまとめ】

参加した学生からは、「普段は和気あいあいとしているメンバーから、支援についての真剣な話が聞けた」「支援するにあたって何をしなければならないかを考えることが出来た。支援の利用者側について知ることができたからだと思う」等の感想がありました。さらに、「支援で大事なことが相互のコミュニケーションであるなら、同じ場所で生活することは大事だ」「支援利用者から耳の痛い一言を聞いて、いろんな障害支援の方法を自分なりにでも追及したいと思った」など、今後に向けた具体的な感想も聞かれました。

少人数のグループで意見を出し合う時間を確保したことで、普段は言わないまになっていたこともお互いに意見が交換でき、新たな視点が得られたり、自分と同じ意見に共感したりすることができたようです。普段は授業の合間に支援活動があり、その都度感じたことについて話し合う機会が十分ではありませんでしたが、このミーティング企画以降は、支援ルームに隣接した交流スペースで、支援活動の意見交換や悩みの相談等に話し込む学生を多数見かけるようになりました。

実践事例③	夏期合宿での講演会
解決したい課題	障害学生のことを理解しようとする努力をしてほしい。
取り組みの内容	①聴覚障害当事者による聴覚障害学生支援についての講演を聞く。 ②講師個人の支援にまつわる経験を聞いたり、アメリカ留学中に大学で受けた授業支援（手話通訳など）の映像を視聴したりする。
開催時期・時間	夏季休暇中
実施する目的 期待する効果	<ul style="list-style-type: none"> ・聴覚障害学生についての理解を深める。 ・支援方策について、改めて支援学生が考える。
実施後の効果 など	<ul style="list-style-type: none"> ・話の中から手話の重要性を学生が強く感じ、手話を学びたいという学生が増えたため、手話研修担当学生は、さっそく合宿後から手話研修会を開始。参加者は毎回10名内外である。 ・聴覚障害学生が「私も頑張ります」と言いに来て、活動している。 <p>【感想文より】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アメリカでの支援の実態や聴覚障害者の思いなど多くの事が学べた。 ・お話によって、私たちが全く気付くことのできなかったこと、分かりきっていなかったこと、実践できていなかったという、特に心理的なところを改めて気づかせてもらった。今後の活動に生かしたい。 ・支援ルーム所属学生が直面する問題と大いに関わる経験談も聞けて、支援活動について考えさせられた。 ・ノートテイク活動の意味がよく分かった。「私は情報保障から逃げられない」という言葉に、情報保障への責任を感じた。 ・プロの通訳者さんを目のあたりにして、通訳の参考になった。 ・日米の情報保障の違いから、これからどういう支援を目指すのかを考えさせられた。 <p>【今後に向けて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障害を持っておられ、かつ社会的に活動しておられる方のお話を伺うことは、支援学生・利用学生双方に意味があることを感じた。 ・次回は視覚障害の方を講師に招く等して、障害当事者の講演企画は継続したい。

【コラム1】 交流分析で見直す利用学生と支援学生の関係性

池谷航介（大阪教育大学）

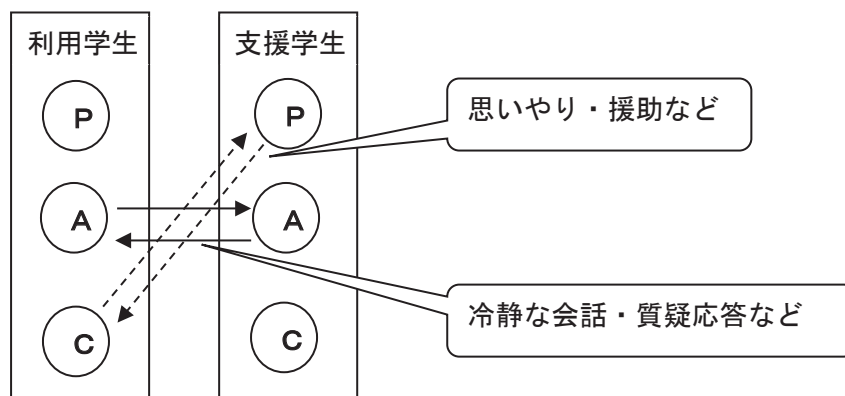
障害学生支援を進めるにあたって、利用学生と支援学生の関係性を構築することは、とても大切であるといえます。お互いに信頼でき、気兼ねなく対話のできる間柄であれば、日々の支援をより円滑に実施していけることでしょう。

もちろん利用者は利用者の、支援者は支援者の立場とモラルに留意しつつ、ひとたび支援から離れると、襟元を開いて交流ができればよいのではないかと考えます。

E.Berne の「交流分析」では、人は自分の内部に『親的な私 (P)』、『大人の私 (A)』、『幼児的な私 (C)』、以上 3 つの自我状態を有しているとして、そのコントロールによる人間関係の改善が提唱されています。

この「交流分析」の知見を踏まえ、「障害学生支援における、よりよい人間関係の構築」を考えてみることにしましょう。

【事例】支援学生として、週 1 回程度、パソコンノートテイクによる講義の情報保障支援を半年間続けてきました。講義中で先生の話す内容が多い時など、利用学生が首を傾げたり難しそうな顔をしたりすることがあって、気になりました。授業後、「支援のことで何かあれば、伝えてくださいね」と尋ねてみましたが、「大丈夫です。特にはありませんよ」と言われました。けれど、その後も同じような場面を見かけます…



社交辞令的な会話による交流 [(A) = (A)] を、もっと共感的な交流に移行するためには、あたり障りのない会話ではなく、[親的な私 (P)] をおしだして、少しばかり感情的な言葉をなげてみてはどうでしょう。

「あなたが難しそうな顔をしていたのが気になって…ノートテイクで分かりにくいところがあれば、教えてくださいませんか」となげかけると、「実は…」という利用者の [幼児的な私 (C)] によるホンネが返ってくるかもしれません。

このような交流の先に、豊かな関係性の構築が進められるのではないかと考えます。

【参考文献】交流分析のすすめ～人間関係に悩むあなたへ～杉田峰康著（1990）日本文化科学社

2. 学内行事や技術研修・交流企画などに取り入れられる実践事例

実践事例④	障害のある学生の修学支援に関する FD/SD 講演会
解決したい課題	聴覚障害学生を支援する学生のが障害に対する理解を深めることは、支援に大きな影響を及ぼす。また、それを支える大学関係者の理解も重要である。支援学生を含む一般学生も対象とした FD/SD 講演会を開催することで、障害者理解を深めたい。
取り組みの内容	<p>①障害のある学生の修学支援のうち、就職活動を含めたキャリア教育に関連した講演会を行う。</p> <p>講師として、厚生労働省の障害者優先調達推進法を受けて、県内で共同受注窓口の事業を立ち上げた肢体不自由当事者を迎え、障害学生の就職活動に直接役に立つような内容も含め、今の活動に至るまでの経験等を話していただく。</p> <p>②併せて、肢体不自由者の学生 2 名による「生い立ちの記」と題したミニ講演を行う。</p>
開催時期・時間	約 2 時間
期待する効果	就労の分野で活躍する障害当事者の講演を聞くことを通し、今置かれている日本の障害学生支援の具体的方向性を見出す可能性が期待できる。
実施後の効果など	<p>【参加者の様子】</p> <p>聴覚障害学生とはまた異なる悩みや苦難に立ち向かっている講師の姿は、参加した学生にとって大変刺激的であったようだ。また講演者が、肢体不自由でありながら県内の障害者と事業主をつなぎリーダーシップを発揮している取り組みは、教員の大きな関心を集めていた。</p> <p>【今後に向けて】</p> <p>質疑応答の時間を長くすることで、内容の深い議論ができた。今後はより多くの教職員、学生、多方面からの関係者が参加できる内容を考えて行きたい。</p>

やってみました！実践報告

障害のある学生の修学支援に関する FD/SD 講演会（愛媛大学）

実践事例④をもとに、更に学内の障害学生支援を推進するため、翌年度、別の講師を迎えて行った講演会および学生の支援活動報告の様子を紹介します。

【企画の動機と趣旨】

これまでは学内支援に着目した研修を行ってきましたが、近年、企業の障害者雇用が進む一方で、就労後に職場で苦しい思いをする障害者の数も増加しています。障害のある学生が就職した先で起こった事例から、就労支援の必要性を痛感しました。このことは障害学生本人たちだけの問題に留まらないことから、教職員、及び一般の学生も解決の手だてを知ることが必要であると考え、講演会を企画しました。

また、学内の障害学生に対する支援学生の活動について啓発を図るため、PEPNet-Japan のシンポジウムに参加した学生がその報告を行う機会も設けました。

【企画内容】

1) 講演『これからの就労支援を考える』

労働法と障害者虐待防止法を関連させ長年手話通訳としても活動されてきた司法書士を講師に招き、講演をしていただきました。

2) ・パネル発表で、学生による PEPNet-Japan シンポジウムの報告を行いました。

・聴覚障害生と共に学んできた4回生の活動を振り返りまとめた冊子を配布して、障害学生支援活動の周知に努めました。

これら企画と併せて、講演会に際しては、教職員や学生に情報保障支援についての理解を深めてもらうため、学生がパソコン連係入力による文字情報保障を行いました。

【参加者の声と成果】

学生、教職員合わせて 75 名とこれまでの約 2 倍もの参加者があり、徐々に障害学生支援への関心が高まったと感じられました。また、多くの学生から、障害者虐待防止法の意義と社会の厳しい現実に驚きの声がありました。教職員からは「現状を聞き、在学時から就労支援を考えて行く事が大切」という感想が聞かれました。

併せて学生によるパソコンノートテイクを実施したり、パネル発表を行ったりしたことで、これまで障害学生支援に縁のなかった教員や学生が、活動内容に関心を示してくれるという副次的な効果も大いに得られました。特にパネル発表を担当した学生にとっては、これまでの支援活動を総括する機会となり、発表を見た後輩の支援学生にとっては、今後自分たちが活躍していこうと期待を膨らませる契機となったようです。

実践事例⑤	2 大学合同：パソコンノートテイク関係入力の基礎講座
解決したい課題	<p>関係入力によるパソコンノートテイク支援の歴史が浅く、独自に支援を行ってきたために、現在のやり方が正しく効率が良いのかどうか分からない支援学生が、近くに立地する支援経験の豊富な大学を訪れることにより、よりよい支援方法を見つけ出したい。</p>
取り組みの内容	<p>パソコンノートテイクの取り組み経験の長い大学でリーダー的な役割を担っている支援学生を指導者として講座を行った。効率の良い準備の方法や、単語登録による効率化など、日々の実践から生まれたノウハウが指導された。また、画面のスリープ時間の設定や、ソフトウェア (IPtalk) の立ち上げ設定など今まで分からなかったことを質問する良い機会となった。そして、2 大学の学生が双方の支援方法の違いを知り、学ぶところが大きかった。</p>
開催時期・時間	後期に 1 回 (120 分)
実施する目的 期待する効果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援経験の浅い大学の支援学生が支援実績の多い大学から学ぶ。 ・ 他の大学と合同で研修することで、それぞれの支援方法を比較し良い点を吸収し合う。 ・ 学んだ内容を学内でも広く伝えられるようにする。
実施後の効果 など	<p>【参加者の感想】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教えてもらった単語登録やショートカットキーを実際の授業のテイクで使うことで、前よりノートテイクがしやすくなった。これから単語登録など充実させていきたい。 ・ 改めて基礎を学び、すぐに活用できるものが多く、実施してよかった。 ・ 今度は新規に教える側になりたい。 <p>【今後に向けて】</p> <p>支援経験の浅い大学も独自の基礎講座ができるように、支援経験の長い大学に倣ってレジュメを作ったり、マニュアルを作ったりしていきたい。マニュアルがあると、人に説明しやすく、技術を一律に高めやすくなると感じた。</p> <p>また、支援学生同士で支援技術について自発的に情報交換を行うようになった。こうした交流により文字通訳の質の向上にもつながった。</p>

実践事例⑥	2 大学合同：全国手話検定 4 級・5 級対策講座
解決したい課題	全国手話検定の受験をめざす学生を対象に、2 大学合同講座を開催することにより、受験合格を目指すと共に大学間の交流を深める。
取り組みの内容	試験対策の問題集を基に、手話の単語の読み取り練習・単文及び長文の読解を行う。また面接練習として、テーマに基づいた発表を一人一人が行い、それに対して質疑応答の練習にも取り組む。講座修了後にはお互いの大学の聴覚障害学生への支援の様子を話し合っていた。
開催時期・時間	90 分×3 回
実施する目的 期待する効果	受験に向けての学生のモチベーションを高めると共に、手話の技術の向上、また相互の大学間の情報交換の場とする。
実施後の効果 など	<p>【参加者の感想】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人でどのような勉強をすればよいのか悩んでいたのが、傾向と対策が理解できて良かった。 ・皆で協力して取り組むことにより、更にモチベーションが上がった。 ・他大学の方と知り合えて良かった。 ・また、機会があれば参加したい。 <p>【今後に向けて】</p> <p>手話関連の試験対策講座は、一年を通して定期的に行っていくと更なる技術の向上と合格率の向上にもつながると考えられる。また、2 大学間で協力して行うことで、相互の親交を深めると共に、支援活動の充実を図りたい。</p>

3. 日常の取り組みやコミュニケーションの中で取り入れられる実践事例

第1章で述べた PEPNet-Japan 連携大学・機関への調査では、各大学の支援担当教職員から寄せられた回答の中で、支援学生が主体的に支援活動に関わるための様々な工夫や試みが寄せられました。担当教職員の方々の創意工夫の詰まった実践の数々が、各大学で行われていることがわかりました。

ここでは、日々の支援活動の中、あるいは支援学生と担当職員との関わりや支援室の環境づくりなど、日常の取り組みの中ですぐに取り入れられる実践事例を紹介します。第1章に掲載した図4（p15）の内容と照らし合わせてお読みください。

1. 開かれた支援室づくりを工夫する（「支援学生と関わる機会を作る」取り組みとして）

支援室に出入りしやすい雰囲気を作り、いつでも職員や仲間と話ができる環境を心がけています。

昼休みに昼食場所として支援室を開放し、用事がなくても支援室に足を運びやすくしています。

2. 日頃の言葉掛けを工夫する

（「現場の問題を聞く」「感謝・評価を伝える」取り組みとして）

支援学生一人ひとりと対話する機会を大切にしています。

「ありがとう」「助かったよ」といった言葉かけは惜しみなくしています。

支援活動の中で、工夫して対応ができた場面などでは、必ず言葉をかけてほめたり、ねぎらったりしています。

支援後に報告書を提出しに来たとき、出来るだけ声を掛けたり支援の様子を聞いたりするように心がけています。

支援学生一人ひとりに支援活動への感謝を書いたメッセージカードを贈っています。

機会あるごとに、「頼りにしている」と支援学生に伝えています。

3. 定期的に支援活動できない学生に、参加や活動の機会をつくる

(「活動の参加範囲を広げる」取り組みとして)

ミーティングや交流会の連絡に対しては、“欠席でも返信する”というルールにしています。

打ち合わせや反省会の記録は、欠席したメンバーにも送るようにしています。

高いスキルがなくても関われる活動を用意しています。(支援学生募集のチラシ配布、映像教材の文字起こし、支援活動のPR など)

支援経験の有無に関係なく参加できる、交流会などの行事を企画しています。

4. 活動経験の長い学生に、活躍の場をつくる

(「視野や教養を広げる」「活動の参加範囲を広げる」取り組みとして)

初心者の学生とペアで支援担当してもらおうよう調整しています。

ノートテイク講座で講師やアシスタントを担当してもらっています。

学外から見学者が来た時に、活動紹介などの対応を任せます。

学外で活動発表の場があれば、積極的に参加してもらっています。

5. 利用学生と合同の意見交換の場を設ける

(「現場の問題を聞く」「支援学生とかかわる機会を作る」取り組みとして)

昼休みの時間を利用して定期的なミーティングを開き、支援に関する問題を共有するようにしています。

月1回、その月の支援活動を振り返る反省会を実施しています。

利用学生ごとの支援担当者チームを作り、チームミーティングを開いています。

前期・後期の終わりに、利用学生と合同の意見交換会を実施しています。

【コラム2】なぜ経営学なのか？！ドラッカーから学ぶ障害学生支援

原田美藤

ピーター・F・ドラッカー（Peter・F・DRUCKER）（1917-2005）は経営学の神様と呼ばれ、マネジメントの体系化と深化を通じて社会を人間的なものとし、人々を幸せにしようという思想を提唱しました。この考え方は永続的であり、障害学生支援組織の構築にも活用できるものです。多くの名言や考え方を障害学生支援に当てはめてみました。皆様の大学で参考になれば幸いです。

1) できる事は何？

できる事から始めることで、次の「できる事」が増えていくのです。すべての始まりは一步からです。

2) 優先順位をつける

「できる事」の中の優先順位をつけることで、ショートのスパンで対応しなければならない事、ロングスパンで考える事が整理されます。具体的な筋道が見えてきます。

3) 強みを活かす

メンバーのそれぞれの強みを活かすことで組織全体がより強化され、強いチームとなります。そして弱みはより軽減されて弱みでなくなります。

4) 責任を持たせる

リーダーだけが責任者ではありません。メンバーの強みをより強固にして協調できるチーム作りをするために、責任を持たせる事で意識向上につながります。

5) 出番をつくる

人前での発表や司会などの出番をメンバーに回すことも、責任感や成長につながります。日陰になっているメンバーはいないか心配りができるチーム作りをしましょう。

6) 競争から得られるもの

「競う事から生まれるエネルギーを楽しく生み出す」と、ひとりで取り組む以上の成果を生み出します。パソコン早打ちコンテストなどの開催のほか、親睦会等でレクリエーションなどを取り入れることも有効です。

7) ミッションは何か

そのチームのミッションは何かをはっきりさせる事でメンバーの向かう方向が決まります。何のためのメンバーなのか、共通理解は不可欠です。

8) ミッションには常にイノベーションが必要

人の成長や環境の変化などミッションを見直すことで組織の向上や個人の成長を促して行くと活性化につながります。

9) マーケティングを行う

マーケティングはどんな組織にも必要です。利用者が真に求める支援やサービスを知り、効果的に情報提供することが大切です。ニーズを収集して初めて支援活動が成り立ちます。また利用者だけでなく支援者側のニーズも知り、活動を円滑にする工夫をしていきます。

第 3 章

第3章 支援学生を対象としたモデル研修の取り組み

1. 「支援学生研修会－利用学生と学ぼう！－」について

この研修会は、本事業の一環として、「利用学生との協同」というテーマの下で、支援学生を対象とした複数大学合同の研修会を実施しました。支援学生が、支援を利用する聴覚障害学生と共に課題に取り組む研修を通して、利用学生と深く関わることで支援活動をより展開させられることに気づくとともに、利用学生との関係作りや共同作業において重要となる視点・方法を身につけることを目指してプログラムを構成しました。

本研修会の大きな特徴として、

- ① 学生時代に情報保障を利用した経験があり、現在も大学における聴覚障害学生支援に携わっている成人の聴覚障害当事者に、「アドバイザー」役を依頼し、研修の様子を見守っていただきながら参加学生に対し細やかな助言をしていただいたこと
- ② 現役の大学生で情報保障支援を利用している聴覚障害学生に協力していただき、研修の各場面で、利用学生の立場から意見を述べていただいたこと
- ③ PEPNet-Japan 連携大学から、一定の支援経験のある学生を募り、複数大学合同で実施するモデル研修会として開催したこと

が挙げられます。モデル研修会という位置づけから、アドバイザー役は国内の聴覚障害学生支援の第一線で活躍する現役の教員やコーディネーターに依頼しました。また、参加学生として、各大学から支援活動のリーダー役を担う学生が多く集まりました。

しかし、一つひとつのプログラム内容は、一大学内で企画し実施することが十分可能なものとなっています。本研修会のノウハウを取り入れつつ、アドバイザー役を卒業生の聴覚障害者に依頼するなどして、大学独自の研修を展開することが十分可能です。

ここでは、各大学で実施する研修会や交流会に取り入れていただくことを目的として、本研修会で実施した4つのプログラムの詳細および実施状況を紹介します。

【参考】支援学生研修会 開催要項

1. 名 称

平成26年度日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク
モデル事例構築事業「情報保障者における主体性の醸成を目指したマネジメント」
支援学生研修会－利用学生と学ぼう！－

2. 日 時 平成26年8月29日（金）10時～16時

3. 会 場 筑波技術大学天久保キャンパス（茨城県つくば市天久保 4-3-15）

4. 対 象

PEPNet-Japan 連携大学に在籍し、聴覚障害学生への情報保障支援活動を 1 年以上行っている学生で、研修を受けた後にその成果を学内の支援活動に還元する役割が期待でき、かつ事後の追跡調査や課題に協力いただける方。

5. 定 員 20 名

6. 主催・協力

主催 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）

みやぎ DSC

協力 愛媛大学／大阪教育大学／関東聴覚障害学生サポートセンター

7. プログラム

時間	内容
10:00～10:15	開会式
10:20～11:20	研修①（オリエンテーション） 参加者同士の自己紹介等を通して、お互いに率直に意見が言い合えるような関係（雰囲気）を作る。また、②以降の研修に臨むにあたり本研修の主旨を理解する。
11:30～12:40	研修②（深く学ぼう！（ロールプレイ）） 次回の授業支援に向けて打ち合わせをしなければならない場面のロールプレイを通し、支援学生としてどのような対応が取れるのか、何に留意すれば最善の情報保障となるのか等を学ぶ。
12:40～13:30	休憩
13:30～14:40	研修③（広く学ぼう！（ディスカッション）） 支援現場で起こる様々な場面について、他の参加学生や利用学生の意見を聞いて情報保障に対するニーズの多様さを知るとともに、支援者としての視点や選択肢が広がるよう、意見交換を行う。
14:50～15:40	研修④（プランを作ろう！） 研修で学んだことをもとに、後期の支援活動で実践に取り入れることなどの活動計画を作成する。
15:45～16:00	閉会式

8. アドバイザー（50 音順）

太田琢磨氏（愛媛大学バリアフリー推進室）

岡田孝和氏（関東聴覚障害学生サポートセンター）

松崎 丈氏（みやぎ DSC／宮城教育大学教育学部）

吉川あゆみ氏（関東聴覚障害学生サポートセンター）

2. 各研修の内容と当日の様子

研修①	オリエンテーション 自己紹介
研修内容	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の支援活動の現状と課題を整理し、他参加者と共有する。 ・本研修会の主旨を理解して、自分が解決すべき課題や学ぶべきテーマを発見する。
時間	60 分
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の支援活動の現状と課題を整理し、他の参加者と共有する。 ・研修会の主旨を理解して、自分が解決すべき課題や学ぶべきテーマを発見する。
会場配置	<div data-bbox="582 779 1086 1126" data-label="Image"> </div> <p>(当日は参加学生のみ半円状に顔が見える配置で座りましたが、アドバイザーや利用学生も同じ輪の中にいて顔合わせができたほうが、その後の研修活動でよりコミュニケーションが取りやすくなったのではないかと の意見が出されました。)</p>
人員	進行役（自己紹介の進行） 1 名 講師（研修主旨の説明） 1 名 進行役補助（時間管理・情報保障対応など） 1 名
情報保障	手話通訳及び文字通訳 （進行役および参加学生の発言をアドバイザーに伝える）
進行	<p>（※参加者には、事前に自己紹介の下書き用紙を送付しておき、「自己紹介」「利用学生との関わりについて感じている課題」について 3 分で発表できるよう準備しておくよう伝えておく）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○概要説明（3 分） ○参加者一人ずつ、自己紹介・支援活動上の課題を発表する。（30 分） （3 分×10 名） ○参加者同士、質疑応答を行う。（10 分） ○調査結果をもとに本研修会の主旨とねらいについて説明する。（10 分）

当日の様子

【自己紹介】

支援活動に携わったきっかけや現在の役割や活動の様子、日頃感じている課題について1人3分で発表し、各発表の後に1～2人から質問を受ける形で進めました。参加学生にはあらかじめ持ち時間と話すべきトピックを連絡しており、発表準備のための下書き用紙も配付しておきました。進行役は本事業メンバーの中から支援室でコーディネートを担当している職員の方が担当し、最初に自身の自己紹介を話したり、質問するよううまく促したりして、場をリラックスさせながら進行了しました。

【研修の主旨説明・調査結果の報告】



今回の研修プログラムの裏付けとなった調査研究の結果や、研修テーマが「利用学生との関わり」に設定された経緯について、事業代表者から説明を行いました（内容は、本事例集の第1章を参照）。参加学生の多くが学内で支援活動のリーダー的存在であったこともあり、自身の抱える課題からさらに全国的な支援学生の現状や課題に目を向け、広い視野でこの後の研修に臨んでもらうためのオリエンテーションとして、こうした趣旨説明を実施しました。

【研修後の参加者の声】

- ・他大学の支援活動の様子が聞けて視野が広がった。
- ・色々な経緯で支援活動をするようになった学生がいることがわかった。

【まとめ】

今回は複数大学の学生による合同研修会という形態であったため、参加者がお互いを知る時間は不可欠ということで冒頭にこのプログラムが設定されました。10名という少人数であったこともあり、この時間を機に参加者同士コミュニケーションが取りやすくなったようです。ただ、別の大学とは言え支援を始めたばかりの1年生から支援経験の長い4年生や大学院生、手話を覚え聴覚障害学生と付き合いなれた学生やそうでない学生など様々な参加者がいたことを考慮すると、経験値や学年による垣根を取り払ってフラットな人間関係を作るために、もっと活動に工夫ができたかもしれません。支援活動と関係のないテーマで話をしたり、レクリエーションの要素を取り入れた活動を行ったりしてアイスブレイクを図る方法も効果的かもしれません。

研修②	ロールプレイ
研修内容	授業の情報保障の方法について利用学生と相談する場面にロールプレイで取り組み、コミュニケーション方法や相談の進め方を学ぶ。
時間	60 分
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・支援学生が利用学生と協同して働きかけることで、情報保障の環境改善に役立てることを知る。 ・利用学生との協同作業や意見交換の際に、持つべき視点や態度に気付く。
会場配置 (写真 又は図)	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">＜ロールプレイ＞</div>  </div> <div style="text-align: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">＜グループ協議＞</div>  </div> </div>
人員	進行役 1 名 進行役補助（時間管理・情報保障対応など） 3 名 アドバイザー役の成人聴覚障害者 3 名 利用学生役の聴覚障害学生 2 名
情報保障	手話通訳及び文字通訳 （グループディスカッション時、参加学生同士は通訳を介さず直接コミュニケーションを取る。観察しているアドバイザーに対し手話通訳を行う。）
進行	<ul style="list-style-type: none"> ○概要説明（3 分） ○「ノートテイクを行っている授業の最後に、先生から『次週はグループに分かれてディスカッションを行います』とアナウンスがあった」というシチュエーションを説明し、配役を決める。（3 分） ○ロールプレイを行う。（5 分） ○ロールプレイをしてみて気づいたことを各役の学生から話してもらう。見ていた学生からも感想や意見を聞く。（5 分） ○意見をもとに改善策を考え、別の学生が再度ロールプレイをする。（5 分） ○参加学生はグループ単位で、実際にロールプレイを行ったり話し合いをしたりして、改善すべき点や留意点を検討する。アドバイザーは、学生同士が自ら関わり方を調整できるような方法で介入する。併せて、利用学生が議論に積極的に参加するよう、様子に応じて働きかける。（15 分） ○グループの協議内容を発表する。（10 分） ○アドバイザーからコメントする。（10 分） ○まとめ（5 分）

当日の様子

【ロールプレイの様子】

別の大学から参加した支援学生 2 名が、利用学生役の聴覚障害学生とロールプレイに挑戦しました。1 回目に挑戦した 2 人の支援学生は手話や筆談を使って相談を進めました。

支援学生 1／（手話と音声で）次の授業はディスカッションですが、どうします？

利用学生 1／（手話と音声で）ディスカッションに参加するにはリアルな状況を知りたいけど、どういう方法が一番リアルに出せますか？

支援学生 1／（手話と音声で）私が前にノートテイクしたときは、サブの人が周囲の人の発言を書いたけれど、人がいっぱいいるので…。何か他の方法の経験はありますか？

支援学生 2／（音声と口形で）支援者が 2 人入って、1 人がパソコンで授業の流れを要約して、もう 1 人は手話ができる人が同時通訳すると、リアルタイムに情報を得られて復習もしやすいと思います。

利用学生 1／（手話と音声で）手話があると、一番リアルに伝わるから参加しやすいかな。

支援学生 1／（手話と音声で）もし来週やるとしたら、私が手書きであなたがパソコンという方法でどうですか？手書きなら、難しい式とか計算式とかも分かるかな？と思って。

利用学生 1／（手話と音声で）あるいは、手書きと手話では…？手書きと、パソコン？？ディスカッションで手書きとパソコンで、どうなのかな。さっきも手話で出すと言ってくれたけれど、来週だけ手話ができる人に代わってもらうこともできます？

支援学生 2／（音声と口形で）じゃあ来週は、1 人手話のできる人に入ってもらった方がいいですか？

利用学生 1／（手話と音声で）そうですね。

【その後のグループディスカッションで出た意見は・・・】

—あるグループの報告より—

まずは利用学生に、どういう支援がいいのか希望を聞くべきだという意見で一致した。ロールプレイでは、「リアルタイムで情報が出る支援方法がほしい」ということだったので、もしグループ内に手話ができる人がいればその人にお手伝いしてもらうのも一つの方法だと思った。もしだれも手話ができなかったら、ミーティングシートを使って筆談をしたり、いつも通りノートテイクやパソコンテイクで支援をしたり、いくつか選択肢を提案するのが良いという意見も出た。

ただ、利用学生としては、提案されただけではどれが一番速く情報を得られる方法なのかがわからないので、提案した支援学生から、自分個人の考えでいいので意見を言ってほしいとのこと。提案する時にはそうしたことも気を付けたほうが良いということになった。

【利用学生役の聴覚障害学生の意見は・・・】

この研修の目的は、利用学生と支援学生がどうすればコミュニケーションができるのか、どうしたら利用学生は意見を出しやすくなるのかについて考えることだと思っていたけれど、グループディスカッションでは「どういう支援方法がいいのか」という技術面の意見が多かったように感じました。利用学生と支援学生とでどうしたらうまく話し合うことができるのかを、もっと深く話したいと思いました。

【アドバイザーのコメントは・・・】

ロールプレイの中で、利用学生さんの本音をはっきり出ている場面がありましたが気が付きましたか？話し合いの中で利用学生の本音がポロツと出た時、それをつかめるかがポイントです。利用学生さんは「手話がいい」と言いました。その後、パソコンノートテイクをするという話も出ましたが、再度、「手話」と言っていました。これは珍しいことで、普通は1回で支援学生に受け止めてもらえないと、もう言えなくなってしまうのです。だから、最初に手話という希望を受けとめた上で、どういう方法がとれるかという話に進めばよかったと思います。大学によっては、手話通訳をつけることが予算的に可能なところもあるかもしれません。


【研修後の参加者の声】

- ・ ロールプレイを通して、他の人の対応を客観的に観ることができた。
- ・ 実際によくある場面について改めて考えることができ、利用学生とどのようにコミュニケーションをとればよいか考えることができた。

【まとめ】

ロールプレイやグループディスカッションでは、参加学生たちは自分たちにできる最善の支援方法を懸命に考えていましたが、聴覚障害学生やアドバイザーの意見を聞いて、本音を引き出すことの大切さや、広い視野で支援の選択肢を考えることの大切さに気づくことができたようです。

その気づきをもとに実際にどのように解決するかを考える際には、利用学生との関係にとどまらず、さらに広い視野、広い範囲に目を向ける必要があります。今回のロールプレイの中では、時間や場面設定に制約があったこともあり、「支援室のコーディネーターにも相談しよう」「今相談したことを授業担当に先生に伝えてみよう」というような発言やアクションが出てきませんでしたが、実際にはそうした判断が必要になります。利用学生とどのようにコミュニケーションを取り、本音から解決策を見出すか、ということの次の段階には、関係する教職員と事態を共有し、解決策についての合意形成を図っていくというプロセスが続きます。このようなロールプレイを研修の中で行う際には、支援担当教職員からそのような全体像を伝えアドバイスしていくことも必要になります。

研修③	グループディスカッション
研修内容	利用学生と支援学生の間で起きている問題点に関わる題材を提示し、自分の意見を Yes/No で答え、それぞれその選択の理由を話していく。その中でその理由に基づいて起こす行動まで考えが及ぶように話し合いを行っていく。
時間	60 分
ねらい	ディスカッションを通して自分の率直な意見を述べる。また、他の人の様々な意見を聞いてその人の考えを知り、自身の情報保障に対する姿勢や考え方を振り返る。
会場配置	
人員	ファシリテーター 2 名（各グループに 1 名） アドバイザー 4 名（各グループに 2 名） 利用学生役 2 名（各グループに 1 名）
情報保障	<ul style="list-style-type: none"> ・全体進行や発表の際は、手話通訳・文字通訳を行う。 ・グループディスカッションの際は、通訳は行わず直接コミュニケーションの方法をとる。ディスカッションの様子を見守るアドバイザーに対しては手話通訳を行う。
進行	<p>○概要説明（3 分）</p> <p>○提示された題材に対し、各自の意見を Yes/No カードで答え、その理由を話す。理由に基づきどのような行動を起こすかにも考えが及ぶように話し合いを深めて行く。（40 分）</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>テーマ</p> <p>①ノートテイクの練習会には利用学生も参加した方がいいと思う。 Yes 参加した方がいい／ No 参加する必要はない</p> <p>②利用学生は授業（ノートテイク）が終わると毎回お礼だけ言って教室出る。これは十分な情報保障が行えているからである。 Yes そう思う / No そうは思わない</p> <p>③手話を日常使用する利用学生の情報保障を、手話ができる支援学生とできない支援学生がペアで担当することになった。3 人で話す際のコミュニケーション手段は手話とするか？ Yes 手話にする / No 別の手段にする</p> </div>

	<p>④講義中一生懸命テイクをしているが、利用学生が見ていない。これはテイクカーの技術が悪いためである。 Yes そう思う / No そうは思わない</p> <p>○発表準備（5分） ○グループ発表（1グループ各2分） ○質疑（2分） ○アドバイザーからの講評（2名、各2分）</p>
--	--

当日の様子

支援学生5名と利用学生役の聴覚障害学生1名ずつの2グループに分かれ、それぞれ進行役から出されたテーマについて「YES」「NO」の札を使って話し合いました。手話ができる支援学生は手話と音声で、手話ができない学生はジェスチャーや音声、または筆談で話し合いを進めました。また、聴覚障害のあるアドバイザーが、ディスカッションの様子を見ながら適宜アドバイスをを行いました。

Aグループ テーマ①：ノートテイクの練習会には利用学生も参加した方がいいと思う

【ディスカッションの様子】

※以下、ディスカッションの様子をできるだけ忠実に表していますが、一部省略や補足をしている箇所があります。

※ はテーマに関してポイントとなる発言、 は利用学生の本音が表れている部分や本音の引き出し方としてポイントとなった部分です。

支援学生1/YES理由は、ノートテイクだけで練習会をやったとしても何が良くて何が悪いかわからないと思ったので。ノートテイクは一緒にやっていくものなんじゃないかなと思っています。でも、必ず来てと強制はできないかな…、お願いする必要があると思います。

支援学生2/YES理由は、利用学生に来てもらって、練習会で「そこは直してほしい」と言ってもらえると、その場で支援学生からも意見を出したりして、良い方法がわかると思いました。

支援学生3/YES利用学生が来てくれた方が、何のために練習しているのか、支援学生としてはこの人のためにやっているんだという実感がわくから。ただ、利用学生もいろいろ忙しいと思うし、情報保障について考えたくないときもあるかもしれないから強制はできないと思います。でも、たまにでも来てくれると、支援学生としてはモチベーションが上がると思います。

支援学生 4/ **YES** 支援学生の大変さを、利用学生がちょっとでもわかってくれるといいのかなと思うのと、交流会ができたらいいなと思って。そこで支援学生だけが練習をやるよりは、2者で協力して作っていくことが情報保障の理想じゃないかなと思うので、交流ができるといいなと思いました。

利用学生 1/ **YES** 今までの4人の意見に対して思うことはいろいろあるんですけど、とりあえず自分が YES にした理由だけ言うと、支援学生の中には利用学生を見たことはあっても話したことの無い人もいるかもしれないと思ったので、そういう人のために行く必要があると思いました。

支援学生 5/ **YES** 理由は、パソコンノートテイクは情報が多いから授業で実践できるけど、手書きノートテイクは情報が少ないから授業でこだわりが利用学生にあったときに、手書きだと（情報が）限られるからそれを授業に入る前にわかっておきたい。何を一番考えたいかわからないと支援学生が安心できない。

ファシリテーター/ 今みなさんからの意見に対して、質問したいところやもう少し聞きたいところはありますか？

支援学生 1/ 利用学生 1 にお聞きしたいんですけど、さっき「4人の意見にいろいろ思うことがある」って言ってたのを教えていただければと思います。できる範囲で…

利用学生 1/ まず、皆さんがすごく遠慮がちだと感じました。自分も実際に頼まれて本当に行けるかどうかはわからないけど、利用する立場としては、義務じゃないけどやらなきゃいけないことはあると思うので、そのあたりで何でそんなに遠慮するんだろうと逆に思うことがあるんですけど…。

支援学生 1/ 時間をもらうので、お願いしても大丈夫かなって思ってしまった…。

利用学生 1/ でも逆に、支援してもらっているときは（支援学生の）時間をもらってるんですよ…？だから個人的には大丈夫だと思う。

支援学生 3/ （さっき）強制できないって言ったけれど、ノートテイク全体が集まってやるような大きい練習会と、その他に小さい個人的な練習会があるときに、大きい練習会のときはぜひ来てほしいなと思う。その理由は、今まで会った利用学生の中で、あんまり練習会とかに来てくれない人がいて、そういう利用学生と支援学生との間に問題が起きて…というのが多かったのだ。

利用学生 1/ **YES** にしたけど、行って何をするのか、利用学生として何をしてほしいかにもよると思う。行ってもみんな健聴なので、普通の授業のように進められてる場合、自分は必要ないのかなと思うし、内容とか役割をきちんと（利用学生に）伝えていけばまた違うんじゃないのかな。

支援学生 3/ 講師的な役割があれば行きやすい？

利用学生 1/ 講師とまでは言わないけど、ろうだからできることがあると思うから、みなさん呼ぶんですよね？ろうの立場に求めているものが何なのかってというのが利用学生にちゃんと伝わればいいのかなんて思うんですけど…。

支援学生 3/ 実際に利用学生に入ってもらって練習をするとか、練習会のあとに交流会を

開くとか…そういう感じ？

利用学生 1／例えば、利用学生に実際にノートテイクをするのと、支援学生が利用学生役をやって参加をするのと、何が違うんですか？その違いがわからないと、自分が行かなくても支援学生が利用学生役をやればいいと思ってしまう…。

支援学生 3／利用学生のほうが支援を受けるのに慣れているから、見方が違うというか、見るときのポイントが独特だと思う。だからそれを聞きたい。利用学生が練習会に遠慮しないで参加して、いろいろ言ってくれた方がありがたいよね？

支援学生 4／“来てもらう”って思うよりは来やすい場所を作ることも大事なかなと思う。うちの大学は練習会もみんなが来やすい時間、例えばお昼休みとかみんなが来る大学祭のときとかに集まっているので、時間帯を工夫するだけでも来やすいと思う。仲良くなると練習じゃないけどみんなとしゃべりたいなって、それだけでもいいかなって。

アドバイザー／来やすい場所っていうのは何なのかなというのを聞きたい。…逆に行きにくい場所でもいいんだけど、そういう場所ってどんな場所？

利用学生 1／式典とかは行きにくい。あとは真面目な場…。

支援学生 4／みんなが一生懸命勉強してくれていると思うから行きにくい？

利用学生 1／ここ（研修会）も真面目な場所だけど…目的とかやることがはっきりしていれば行きやすい。やることがないと行きにくいかな。

アドバイザー／今まで（練習会等に）参加して「自分は何のために来たのかな」って思った経験ありますか？みんなも具体的に聞きたいと思う。

利用学生 1／座っているだけだから。あとは、技術を高める話だけだから自分はいなくてもいいかなと…。

【以上のディスカッションをまとめると…】

「よりよいノートテイク」を目指していく上で支援学生と利用学生双方が率直に意見交換をしていくことは必要不可欠です。そのためには利用学生にも練習会には参加をしてほしいものです。ただ、利用学生としては、単に参加を求められても自分の参加する意味、役割を見出せず参加しにくいので、練習会でどんなことを利用学生にお願いをしたいのかを明確に伝えるといいのではないのでしょうか。また、利用学生が練習会に参加する場合には、利用学生にもその場の情報がきちんと伝わるようにすることが大切です。

このディスカッションでは、利用学生も前半から積極的に意見を述べていましたが、後半でアドバイザーから、より具体的な経験を聞き出すような質問を投げかけたことによって、更に一步踏み込んで、「利用学生がなぜそう思うのか」を聞き出す展開に進むことができたようです。

**Bグループ テーマ②：利用学生は授業（ノートテイク）が終わると毎回お礼だけ言って
教室を出る。これは十分な情報保障が行えているからである**

【ディスカッションの様子】

- 支援学生 1／**NO** 私の場合だと、いつも最善を尽くすんですけど、できないところがやっぱりあるので、気になったところやあんまり書けてないところは後で調べてほしいとか、先生や友達に聞いてほしいっていうのを正直に言うようにしている。全部完璧にできることがあるのかな？と思って **NO** にしました。
- 支援学生 2／**NO** 私がテイクをするときも、「ありがとうございました」と言って帰る利用学生がいるんですけど、それは、完璧だからじゃなくて （意見を）言にくいのかなって感じがする。完璧な情報保障だからということではないと思う。
- 利用学生 2／**NO** いつも講義が終わった後「ありがとうございました」と言って帰るんですけど、それは 完璧な情報保障ができたからじゃなくて、情報保障があることが嬉しいから、来てくれてありがたいの意味を込めてのお礼 として言います。
- 支援学生 3／**NO** ノートテイクしてくれてのありがとうかなって思う。直接支援学生に（意見を）言にくい と思うから、職員さんとかに「あの支援学生はちょっと…」とか言うのかな。だから直接言わずにお礼だけで帰るのかな。
- 支援学生 4／**NO** 毎回「あそこがちょっと」とか「そこがちょっと」と（意見を）言っていたら 支援学生も利用学生もそこまで言っているのかなって いうのがあって、お礼だけ言うのかなと思う。
- 支援学生 5／**YES** 本当は **NO** の意見です。でもここではあえて話がしたいから **YES**。（利用学生から）何も言われないと支援ができていると思う。 また利用学生は聞こえないから支援学生から「大丈夫？」って聞かれても、（支援がないと）講義がわからないのと同じだから支援できているかどうかの判断ができない。支援をした内容が1つの講義になっていると思うから、それを考えると支援ができていると思う。
- アドバイザー／（支援学生から）「利用学生はありがとう以外に何か言いたいことがあるんだろうけど言にくいんだろうな」という意見があったことに対して（利用学生 2）はどうですか？
- 利用学生 2／（言にくいときは）ときどきある。（パソコンノートテイクの方法は）大学によって違うと思うけど、私の大学の場合は入力部の文字も出ているから、表示部だけでなく入力部を見る時もある。変換し直さなくてもいい漢字を一生懸命直しているとか、「か」を打ちたいけど「K」と「あ」になってしまったという時、また打ち直すのは私はいらなくなって思う。
- アドバイザー／（支援学生に）意見を言にくいのはどうしてですか？
- 利用学生 2／やっぱり遠慮してしまうのかな。 正しい言葉や文字を見て覚えているわけだ

から、(支援学生は)正しい言葉を入力してあげたいという気持ちがあるのかなと思って。修正してくれた意味まで考えると(さっき言ったような)意見を言い出しにくいと思う。

アドバイザー／今言ったように(利用学生は)自分の中だけで考えて遠慮して終わってしまうということがあるようですが、それに対して支援学生のみなさんはどう考えますか？

支援学生 3／支援学生として「今日はここが悪かったな」と思っても利用学生に聞きにくいというのは(利用学生が意見を言いにくいということと)同じだなんて思います。でもそこを一步頑張って意見を聞くことが必要かなと思いました。

支援学生 5／利用学生も支援学生も優しすぎるのかなと思った。どちらも自分の言いたいことを言える関係を作っていく必要があると思います。僕の大学で、利用学生と支援学生の交流企画をやった後に、ちょっと仲良くなったということがあった。そういうことをやっていったほうがいいと思う。関係づくりがキーワードになると思う。

【以上のディスカッションをまとめると…】

「ありがとうございました」と言われただけでは、支援が十分にできたかどうかはわかりません。支援の前後はお互いに授業等があり時間も限られてしまうと思いますが、講義の内容や情報保障の方法について確認することが大切です。実際の支援で気になった部分や情報を漏らしてしまった部分があるのであれば、「今日のこの部分の内容理解できた？」等、聞き方の工夫をしてみるといいですね。お互いに意見を言い合えることでよりよい支援につながっていくと思います。

このディスカッションでは、はじめに支援学生から「言いにくいのかな」と利用学生の気持ちを推し量る発言がありました。それを受けてアドバイザーが、利用学生に対してははっきりと理由を尋ね、「なぜ言いにくいのか」に焦点を当てた意見交換を進めることができました。

【アドバイザーからのコメント】

利用学生にも遠慮があって意見が言いにくいということだけで終わらせてしまうのではなく、利用学生が意見を言いにくいということに対して「どうして言いにくいと思うの？」と、利用学生と言いにくい理由をきちんと話をすることまで進める必要があります。遠慮するのではなくて、自分の気持ちをはっきり言う・聞くということが大切です。

研修を終えて


【研修後の参加者の声】

- ・いろいろな人の意見をじっくり聞くことができた。同じお題でも違う答えがあったり、違う答えでも考え方は同じであったりする部分が面白いと思った。
- ・利用学生、他の支援学生の意見をきくことができた。アドバイザーの方から、途中で、自分では気付かなかった視点を出していただいた。
- ・利用学生さんの本音をアドバイザーの方からの質問から聞き出していただけだったので、貴重な意見だと思った。支援学生たちだけではうまくいかないところを、アドバイザーの方が支えて下さって本当に助かった。

【まとめ】

ディスカッションでは自分の意見を率直に述べ、他の学生の意見を熱心に聞く様子が見られました。他大学の学生の考え方を聞くことができ、自分の普段の支援（活動）を振り返ることもできたようです。ただ、支援学生、利用学生だけでは意見を述べるだけで、利用学生がどうしても意見を言いにくいのか等利用学生の本音までは引き出せませんでした。利用学生の本音を聞き出したいときには、今回のディスカッションの中でアドバイザーが行っていたように具体的に聞いていく、逆説で聞いていくなど聞き方を工夫すると利用学生も答えやすくなります。各大学で行う際にも、今回のアドバイザーのような立場の人（大学等での情報保障を受けたことがある成人の聴覚障害者や情報保障者養成に関わっている成人の聴覚障害者）に入ってもらってディスカッションを進められるといいのではないかと思います。難しい場合は支援にかかわっている教職員と一緒に参加するといいかもしれません。

また、このグループディスカッションの方法をとると、特定の相手には直接聞きにくい、言いにくいことも大勢の中で話題にすることで伝えていくということができるため、支援学生、利用学生がお互いに本音が言えないときなどはそれを話し合う一つの手段（きっかけ）として取り入れてみるといいのではないかと思います。

研修④	行動プランづくり
研修内容	一日の研修で学んだことを整理し、今後の支援活動の中にどのように活かすかを、具体的な企画や行動として計画する。
時間	60 分
ねらい	・利用学生との関わり方に着目し、後期から所属する大学での支援活動の中で研修成果を生かすため、どういったことに取り組むか具体的なプランを立てる。
会場配置	 <p>・スクール形式で着席 ・記入したシートを投影して発表できるよう OHC を用意する。</p>
人員	進行役 1 名 進行役補助（時間管理・情報保障対応など） 1 名 アドバイザー役の成人聴覚障害者 4 名
情報保障	手話通訳及び文字通訳 （進行役および参加学生の発言をアドバイザーに伝える）
進行	<p>○概要説明（5 分）</p> <p>○参加者のうち何名かに研修①～③を振り返ってのコメントを求め、プランシートの作成にどう関連付けるか「方向づけ」をする（8 分）</p> <p>○各自プランシートを作成する。時間内で少なくとも「行動計画」までは記入するよう促す。（20 分）</p> <p>アドバイザー、進行役は学生の作業の様子を見ながら適宜助言を行う。</p> <p>○数名から発表。記入したシートを OHC で投影して提示する（10 分）</p> <p>○アドバイザーからコメント・助言を行う（5 分）</p> <p>○まとめ（2 分）</p>

事後課題「利用学生との関係を深めてみよう」
＜この研修会で学んだこと＞

利用学生との係わり	その他

↓

自分がめざしたい支援学生像は？

↓

利用学生との係わりにおいて課題に感じていること

←

その他課題に感じていること

＜後期に実践してみよう＞

計画していること

A	B	C	D

↓

実際に行動したこと
(どのような状況でどのようなようにしたのか記入してください)

--	--	--	--

↓

成果と課題
(実践してみての感想、周囲の反応や感想、得られた効果、改善点など)

--	--	--	--

※「計画していることA～D」まで清書・記入したものを【9月16日(火)】までに、提出すること。
(E-mail: request@pepnet-j.org、FAX 029-858-9438宛)

図6 プランシート1枚目

(「計画していること」まで研修④で記入。その後、全項目記入して研修1ヶ月後に提出。)

＜後期の活動を振り返ってみよう＞

実際に行動してみて利用学生との関係はどのように変化しましたか？
利用学生に対する自分の係わりはどのように変化しましたか？
自分に対する利用学生の係わりはどのように変化しましたか？
上記に関連して周囲（ペア学生、教員、コーディネーターなど）に対する自分の係わりはどのように変化しましたか？
自分がめざす支援学生像（支援学生としてのありかた）はどのように変化しましたか？
現在課題に感じていること（特に利用学生との係わりにおいて）はありますか？
利用学生との関係の深まりは、自分自身の情報保障支援活動にどのような影響があったと思いますか？
後期の活動を振り返ってみて、8月の支援学生研修会はあなたにとってどのような意味があったと思いますか？
後期の実践を踏まえ、来年度以降でやっていきたいと思った実践を教えてください。
コメント ※講師記入欄

※すべて記入して、11月に提出すること（提出期日は後日連絡）

図 7 プランシート 2 枚目

（1 枚目の記入内容に基づき後期に実践したことを振り返り記入。後期半ばに提出。）

当日の様子

【方向付け】

冒頭で、一日の研修を振り返っての感想を、2名の学生に話してもらいました。

支援学生 1／午前中の研修で、無意識のうちに自分のやりやすい方法で話を進めてしまい、周りの人のことまで考えられていなかったことに気づかされた。また、お互い遠慮せず対等に意見を言えるのが理想的だと思っているが、実際には利用学生が我慢していることもあると分かり、自分の行動を見直したいと思っている。

支援学生 2／利用学生の希望を聞くことが大切だと分かった。利用者なしでは支援活動は成り立たないので、本当は何を求めているかをまず話してもらうことが欠かせない。それから、質問の仕方、という話にはハッとさせられた。「はい」としか答えようのない聞き方をしてしまってきたのではないか。自分の行動を良く振り返りたいと思った。

講師／今日の研修は、一日の中に出会いが凝縮されていたが、ふだんの場合、利用学生との関係は日々継続していくもの。その中で、支援学生・利用学生という立場を超えて、人間同士の関係に近づいていくということが、今日の2人の学びだったのではないかと思う。

【プランシートの記入】

各自記入する時間を約10分取り、プランシートの「この研修で学んだこと」「自分が目指したい支援学生像」「後期に実践してみよう」の記入を進めた。学生たちは一日の研修を振り返ったり、後期の支援活動や支援グループの行事などを思い描いたりしながら、真剣な表情で記入を進めていた。

【プランの発表】

支援学生 3／目指したい支援学生像としては、利用学生だけでなく他の支援学生にも気配りができる存在になりたいということ。後期からの活動では、自分だけでなくペアの支援学生も巻き込んで、利用学生とよく話をしていきたい、そして相談した内容を他の支援学生とも共有しより良い支援を作っていけるようにしたい。

【講師コメント】

プランシートの中に「心を開く」と書いていた学生さんがいたが、利用学生との関係を作るには“自分から”心を開くことが近道なのではないかと思う。そうしたことを心にとめて、後期からの活動に励んでほしい。

【研修後の参加者の声】

- ・研修の時間内に今後のことまで考える機会があって、ありがたかった。
- ・今回の研修が無駄にならないよう、大学にもきちんと持ち帰ってこれからは活かそうと思うことができた。

【まとめ】

「鉄は熱いうちに打て」というように、様々な研修や他大学の仲間との交流から得た学びや情報や視野の広がりを、どうやって支援活動に生かすか、または他の支援学生の仲間に伝えていくか、研修の一環として具体的に考えてもらうことは効果的であったようです。数ヵ月後に提出されたレポートで、行動計画をどのように実行し、その成果と課題は何であったかという記述を見ると、この研修4の時間内に立てた計画は概ね実際の行動にうつされており、何らかの成果を見たり、より実現しやすいやり方を再考したりすることに繋がっていたようです。計画に対して、アドバイザーや他大学の仲間から意見や励ましをもらえることもメリットと言えそうです。

【研修を終えて 参加学生が取り組んだ実践事例】

研修会に参加した学生たちは、「利用学生との関わりを深める」という研修テーマに即し、自身の大学の中で具体的な取り組みを行うという事後課題に取り組みました。学生たちの発案による実践を一部紹介します。「思ったよりも簡単に組み合わせて効果もあった」「実際には継続的に行えなかったが今後も工夫して挑戦したい」など、実施の効果や手応えは様々だったようですが、いずれの取り組みも、日々の支援活動に密着した発想で、利用学生との関わりの中に自然に取り入れられる小さな工夫が多数挙げられています。

<日々の関わりの中で>

- ・授業時の支援が終わったあと、もうひとりの支援学生も含めて三人で必ず会話をする。
- ・通常の情報保障時や支援室での昼食時に、利用学生に手話を教えてもらう。
- ・支援を担当する授業前後の短い時間を活用して、利用学生と支援以外の話をする。
- ・利用学生に意見を求めるだけでなく、「自分ならどんな方法の支援ができるか」を意識して伝えるようにする。

<学生同士の企画の中で>

- ・支援学生と利用学生にアンケートをとり、今どんなことで困っているのかを調査した上で交流会を行う。
- ・利用学生も誘ってノートテイク練習会を行う。
- ・チームミーティングには利用学生にも参加してもらう。
- ・利用学生がミーティングに出席できない時は、SNS などを使ってあらかじめ意見を聞いておくようにする。

- ・利用学生に障害理解についての授業をしてもらい、支援スキルの上達を図るとともに、支援学生の利用学生に対する理解を深める。
- ・研修③で行ったようなグループディスカッションを行い、通常の情報保障時には気づかない、利用学生と支援学生との意見の相違及び個々人の意見の相違に気づく機会を作る。
- ・支援学生・利用学生の交流会で、研修②のようなロールプレイをして、日頃の関わり方を見直す。

【コラム3】 利用学生の“本音”を引き出すには？アドバイザーの言葉から

この研修に参加した学生は、皆、利用学生の本音を聞きたい、本音を知ってニーズに応えたいという思いを持って全国から集まってきました。その一方、ロールプレイやディスカッションの研修では、利用学生の抱える「言いづらさ」に今一歩踏み込めない場面も見受けられました。どうすれば、利用学生から正直なニーズを話してもらうことができるのか。そのヒントが詰まったアドバイザーからのコメントを紹介します。

【岡田孝和氏より グループディスカッションを終えて】

ディスカッションのテーマに「ありがとう」と言うだけですぐ帰ってしまうという利用学生」の例がありました。「利用学生にも遠慮があるのかな」という意見が出ていましたが、「遠慮しているのかな？」「言いにくいのかな？」と気づいたら、そこで終わりにしないで「それはなぜなのか」「自分の側に遠慮を生んでしまっている何かがあるのではないかと、まず自分の側にひきつけて深く考えてほしいと思います。

意見を引き出す方法としては、自分の困っていることをしっかりと開示した上で聞くという方法も有効だと思います。「何か意見ある？」「改善点ない？」というような聞き方は、一見対等な関係のように見えてそうではない面もあります。「このところ書き方迷うんだけどどう思う？」「こういうときにこんな感じでやりにくかったりするんだけど、何か良い案ないかな？」というように、まずは自分が困っていることをハッキリと出した上で意見を求めてみましょう。そうすると聴覚障害学生のほうも、「ああ、なるほどこういうところでノートテイクも困っているんだな」とわかって、具体的に考えてくれるかもしれません。

【太田琢磨氏より グループディスカッションを終えて】

皆さんの中にも手話が得意な人、そうではない人がいてコミュニケーションしている中、誰が今、情報を聞き落としているかということに、もう少し気配りをしたほうがよいと思います。自分の苦手なコミュニケーション方法で議論が始まってしまって、周りに合わせなきゃと心理的に追い込まれることは、誰にもあると思います。ディスカッションの中では、どうしても伝えられないときには書いて見せるなど、勇気をもって対応してくれた人がいたのはすごく嬉しかったです。

それから、声かけの仕方はすごく大事です。転んでけがをして「大丈夫？」と言われたら、「大丈夫」と誰でも答えますよね。「今日のノートテイク大丈夫だった？」と聞かれたら、「大丈夫」と言わざるをえないのです。自分の支援に自信がないから、「大丈夫」という言葉を返してもらえるように、誘導するように聞いてしまっていないでしょうか。今の問いかけ方で本音を聞き出せるのか、もう少し工夫してみたいと思います。

【吉川あゆみ氏より 一日の研修を終えて】

以前に「通訳者とケンカしたことがありますか？」という意外な質問を受けたことがあります。周りのろう者にも聞いてみましたが、「ケンカしたことがある」という人はいませんでした。私自身も、「今通訳者とケンカしてしまうと後々の生活に響くなあ」ということが常に頭にあります。聞こえない人は、こうした人間関係の中で何十年も生きることになりますので、つい遠慮して、どこまで本音を言っているのかと迷ったりするのです。支援に携わるみなさんにはそのことを、そうした聞こえない人の心情を、少し心に留めておいてほしいと思います。

今朝、「利用学生の本音をどうやったら引き出せるか？」という人が何人もいましたが、一日の研修を終えた今、「聞き方」を工夫してみれば本音は引き出せるということがわかったのではないのでしょうか。本音で言い合えるという自信は今日の大きな収穫であり、次につながるステップアップになったと思います。

【松崎丈氏より 一日の研修を終えて】

午前中は、支援学生も利用学生もお互いに関心を持っているものの、その気持ちが重なり合っていない状態だったように思います。「意見を言ってもらいたい」と相手に求めて、自分は受けるだけというところがありました。でも研修が進むうちに、関わり方が変わってきたと思います。コミュニケーション方法だけでなく、お互いに、もう少し相手の気持ちに一步寄り添ってみよう、踏み込んでみよう、ということです。

利用学生が言いにくいのであれば、『『言いにくい』という言葉の裏にあるものは何だろう』というところまで、お互いの背景に向かって一步踏み出した話し合いができるようになってほしい。自分も心を開いて、お互いに気持ちを正直に話し合えるような場をつくることで、支援学生だけでなく利用学生も、主体性の醸成へとつながっていくのではないかと思います。

おわりに

本事例集では、支援学生の主体性の醸成を目指したマネジメントについて基本的な考えや実践事例を述べてきました。ここでは、私たちが改めて支援学生のおかれている状況を見つめ直し、支援学生の「主体性の醸成」を重視することの意味を再確認したいと思います。

支援学生は、情報保障支援を行うにあたって、実に多くの課題をつきつけられていると思います。例えば、言語通訳のように専門的な通訳トレーニングを受けているわけではないので、たとえ謝金を支払う制度があっても、通訳のプロに相当する情報保障の実践は難しいでしょう。また、授業担当教員や受講生の行動、物理的環境、授業の進行や内容などの状況をコントロールして情報保障を行わねばならないのに、学生という立場上、コントロールできる範囲が限られています。さらに、聴覚障害学生が情報保障について率直に指摘・要望したり不安や戸惑いなどを打ち明けたりすることができるようにいわゆるカウンセリング的な係わりが求められますが、そうしたトレーニングを受けているわけではありません。現場で起こる不条理な問題に感情的になったり葛藤したりすることも多いのですが、自分のメンタルを調整する術も備えているわけではありません。このように支援学生は、「学生」の立場でありながら、聴覚障害のある学生や教職員の期待を背負い、障害の有無に関係なく教育を受けることができる大学を作る「支援」に取り組んでいるわけです。自ら大学の聴覚障害学生支援に加わり、献身的な姿勢で取り組んでくれていることには本当に感謝するばかりです。

このように私たちは、上記の状況で支援学生が自分一人で意欲を持ち、現場で求められる事柄を身につけながら活動を継続することは簡単でないということを、忘れてはならないと思います。本事例集でも述べたように、支援学生が活動を継続するためには、謝金支給や証明書の発行といった金銭的インセンティブや人のために何かしたいといった道徳的インセンティブよりも、聴覚障害のある学生との協働作業を通して自分を高めるといった社会的インセンティブが重要になることが示唆されました。聴覚障害のある学生とお互いに心を開いて共感・納得できる対話を経て、情報保障をとにより良いものにしていく協働作業の達成体験は、支援学生にとって自分の存在意味を実感できるものです。また、技術やマナーの質的向上への意欲を高めたり支援コミュニティに積極的に参加したりする原動力にもなります。このような養成・研修の機会を増やす必要があります。「人と人とのつながり」なくして支援は成り立ちません。もし私たちが、いかに技術や倫理観をもっと身につけさせるか、いかに活動を継続させるかというように何かをさせる「対象」として支援学生と係わるのなら、せつかく支援を始めた頃にはあった支援学生の「主体性」は小さく萎み、喪失するでしょう。

また、「学生主体」という名のもとに支援学生にすべてを任せればよいというものでもありません。支援学生が、受動的にならず、支援で本質的に価値あるものは何かを追求しながら聴覚障害学生支援に臨むために、支援学生の主体性の醸成を目指したマネジメントの実践が重視されるのです。私たちは、支援学生の行動や状況をきちんと観察して「主体性の醸成」につながるような取

組をすることで、支援学生一人ひとりが現場で生き生きと活動できるように支えていきたいものです。

皆さんもこれから自分の大学で支援学生の養成・研修を行う時は、ぜひ本事例集を参考にして主体性の醸成をめざしたマネジメントを中心に据えて実践してみましょう。

平成 25・26 年度モデル事例構築事業

「情報保障者における主体性の醸成を目指したマネジメント」

事業代表者 松崎 丈（主幹機関：みやぎ DSC 代表）

執筆者一覧

松崎 丈 (みやぎ DSC)
 佐藤 晴菜 (みやぎ DSC)
 前原明日香 (みやぎ DSC)
 太田 琢磨 (愛媛大学)
 原田 美藤 (平成 25 年度まで愛媛大学)
 池谷 航介 (大阪教育大学)
 小谷佐智子 (大阪教育大学)
 白澤 麻弓 (筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター)
 五十嵐依子 (筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター)
 中島亜紀子 (筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター)
 萩原 彩子 (筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター)

「学生同士がつながる支援コミュニティづくり —支援学生の『主体性』を引き出すマネジメント—

発行日：平成 27 年 3 月 31 日

編集：日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan)
 平成 25・26 年度モデル事例構築事業 合同企画ワーキンググループ

発行：国立大学法人 筑波技術大学
 〒305-8520 茨城県つくば市天久保 4-3-15

ISBN : 978-4-905362-10-4

本冊子は、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) 平成 25・26 年度モデル事例構築事業 (主幹機関：みやぎ DSC 事業代表：松崎丈) の活動成果であり、本事業は筑波技術大学「東日本大震災における聴覚障害学生への支援経験をベースとした大学間コラボレーションスキームの構築」事業の活動の一部です。



国立大学法人

筑波技術大学 PEPNet-Japan

表紙デザイン 藤本彩加 (筑波技術大学産業技術学部総合デザイン学科 学生)

